

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第五十五卷 第八号

昭和三十三年四月十五日 第三種郵便物認可 昭和三十一年八月一日発行
昭和三十一年七月二十五日印刷 日本幼稚園の教育 第五十五卷 第八号 (毎月一回一日発行)
日本国有鉄道特別扱承認雑誌第六八三号



之

日本幼稚園協會

8

幼稚園教育要領の実践

まると二月文部省より発表された
ました幼稚園教育要領の実施
に当り、先生方必読の書。
A5判 二四四頁
定価二〇〇円 下二四四頁

文部省 上野芳太郎先生

文部省 玉越三朗先生

お茶の水女子大 武田一郎先生
附属小学校長

千葉大学 宮内孝先生

南山幼稚園 小山田幾子先生

—新— 実験幼稚園の研究報告(一)

定価 一〇三円

編纂 文部省

昭和三十年年度 幼稚園教育研究集會集録

—幼稚園教育研究資料3—

編纂 文部省

A5判 二五七頁 定価 一一〇円

送料 一部(二四円)二〜一〇部(一部当り一五円)

一〇部以上(弊社負担)

◎いづれも、もよりの弊社代理店にご用命下さい◎

改訂幼稚園幼児指導要録の解説

第1章 改訂幼児指導要録の性格

生 生 生 著

第2章 幼児指導要録の記入のしかた

朗 孝 子 著

第3章 幼児指導要録の活用

三 越 内 田 共 著

第4章 補助簿の作りかた

玉 宮 小 山 著

付録 文部省通達全文

—くわしく・やさしく・わかりよく書かれた完璧の解説書。— 二〇四頁 一六円

堂々の執筆陣

幼稚園教育要領

文部省編

A5判・32頁

発売中・定価八円

一部 八円

二部 一〇部五円

一部 一〇部四円

一部 五〇部三元

一部 以上不要

改訂幼稚園幼児指導要録(用紙)

発売中・定価四円

改訂幼稚園幼児指導要録抄本(用紙)

発売中・定価二円

いづれも文部省制定様式上質純白紙

東京都千代田区神田小川町二ノ五
電話東京(29)七七八一(代)一五・振替口座東京一九六四〇番

株式会社

フレール館



幼児の教育目次

— 第五十五卷 八月号 —

表紙……………堀文子

保育者と研究……………山下俊郎(2)

養護施設の子供たち……………渥美節夫(4)

一年保育と二年保育の問題その6……………八坂富子(8)

鬼めた幼稚園史料……………編集部(11)

☆楽器あそび☆……………村井トミ(22)

☆競争あそび☆……………村田修子(25)

會橋惣三
新庄よしこ共著「日本幼稚園史」のこと……………津守真(27)

マコトちゃんとまことちゃん……………上沢謙二(28)

童話化について(三)……………本田和子(32)

園児の運動能力はどのように発達するか……………岡本卓夫(37)

★かけ出し教師と子どもたち★はじめての保育の経験★A生・Y生……………松沢豪(49)

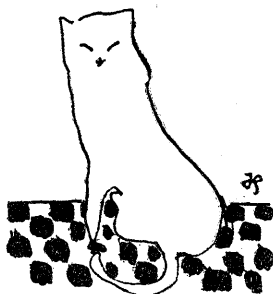
幼児と言語指導……………戸倉ハル(52)

夏の読書室……………村山貞雄(56)

幼児の知能の研究Ⅵ 言葉と知能(下)……………津守真(61)

フレーベル以後の幼稚園(12)……………津守真(61)

保育者と研究



山下 俊郎

去る五月二十六、二十七の両日、長野県の諏訪市で、同市所在の長野県立保育専門学院を当番校として、日本保育学会第九回大会が開かれた。三十一に及ぶ研究発表があり、参会者千二三百人という盛会であった。わたくしも参会し、大会を終えて帰京してまだ数日しかたっていないので、大会の際の所感から、「保育者と研究」ということを思いつくままにひろい出してみたいと思う。

もともと研究というものには二通りの立場がある。その一つは純粹の理論的研究であり、ほんとの研究のための研究である。そしてその二は、実際の役に立てるための実際的研究である。

保育の現場にある人々が何か研究しようとするとき、純粹の理論的研究をすることは、もちろんその人の自由ではある。しかし、その研究はおそらく保育の現場とはすぐにはつながらないものであり、やや縁遠いものになってしまうであ

ろう。そして、研究は研究、仕事は仕事と離れたものになってしまうであろう。この場合は、研究はいわば研究としてまったく遊離したものになってしまうといいであらう。わたくし達は保育に関するこのような研究には別に保育者をもたなくても、関係する心理学なり医者なりの専門家に期待すればよいと思う。

わたくし達が保育者に期待し、保育者に研究してもらいたいと思うのは、保育の現場にいる人でなければとらえられない問題を、その現場の問題解決のために研究してもらおうことである。実際の保育技術の進歩のためになさるべき研究は、まさにこのような研究であり、このような研究は保育者をまたないでは期待できないものなのである。いま右に述べた理論的な研究のまねごとのような研究は、保育の実践家にはむしろやってももらいたくない。保育者には保育者でなければできない研究をやってもらうことが、保育の発展のために必要なのである。

ところで、先般の日本保育学会の大会の場合に限らず、保育関係の研究會、協議會などにおける研究発表には、必ずといっていいくらい、保育者による研究として右の二通りの研究が見受けられるようである。しかし、保育者による研究は、保育者でなければできないような研究であることが何よりも望ましいと思う。

そこで、保育者による実際的な保育の研究というのはどういう意味を持ち、どうあるべきものかということを少し考えよう。

すべて、実際のな技術に貢献するような研究というのは、ある一定の方法にしたがってやったことの結果がうまく行っているかどうか、その効果があがっているかどうかを確かめるといふ研究である。それぞれの方法によって保育したら、それぞれの結果が幼児たちの上に出たということが出て来て、その結果に対して実際のな判断が下されることによつてうまく行ったか行かないかが決定される。

その場合、いまかりに一定の方法といつた方法は、きちんと一定の内容を一定の順序に運んで行くことでなければならぬ。というのは、その方法はその方式のもとにやっていると、どんな人がやってもそのとおりにやって行けるように組織されたものであることが必要條件である。言葉をかえていえば、誰か特定のひじょうに優れた人でなければやれないような方法ではこまるのである。つまり、誰にでもできるように、はっきりとした形に分析されていることが必要なのである。

このような内容や方法の分析は、そう簡単なことではないので、どういふ風にやったらいいか、ということについては、学者が今までにいつてきているいろいろの知見をかりることが必要であらう。そうでないと、いい加減なあいまいなものになってしまふ危険があるからである。

また、やつた方法のもたらした効果の判定ということについても、どういふ方法でどういふ風に判定するかということについても、現在の進歩した方法に基かないと誤りを犯すことになりやすい。だから、この点についても、それぞれ関係する学問の領域からいろいろと力をかりることが必要であら

う。

いま述べたいろいろの点は、研究というものを進めて行く上の方法上の問題に係属している。そして、このことはひじょうに大切なことなのである。というのは、もし研究の方法に欠陥があったら、研究の結果はその信頼度がなくなつてしまふからである。方法はどこまでも厳密でなければならぬ。そして、方法が厳密で誤りがないようにするために、保育者はじゆうぶんの用意をすることが必要である。

わたくしは、研究、とくに科学的な研究というのは、その研究がさきにも述べたように保育の実際に関連するものである限りは、ある一定の方法で保育を行えば、その結果は必ずこの通りになる、ということを示すものであり、そうでなければならぬものであると思う。

保育の技術にすぐれた天才を持っている人、また長年の経験からすぐれた技術を身につけている人、こういった人々は、その人としての優れた保育者であらう。しかし、それはその人っきりのものである。科学的な研究というのは、このような特殊な天才の所有である保育の技術を、誰にでも行えるようにするものである。そして、その根柢をしっかりとさせるために、いま右に述べたようないろいろの分析を必要とするのである。

保育者は保育者でなければできない研究を、しかし、その方法はどこまでも厳密にして、すべての保育者が優れた保育者になれるように、研究すべきであると思う。

(一九五六年五月三十一日)

養護施設の

子供たち



夫節美渥

最近新聞などで「養護施設」という文字が見受けられますが、養護施設とは、どんなところですか。

「僕が小さい時にお母さんが病氣だったので、お父さんは、僕をかわいがってくれましたが、六、七才になった時、お父さんがかえってきて、お母さんとけんかをしました。その時、僕は、すみの方で、びくびくしてみていました。するとお父さんが、家からでていきました。お母さんは、病氣なのでよわっていました。ある時、僕とお母さんといっしょに、お父さんを、さがしにいきました。お母さんはいなかにいるかもしれないと、いったので僕とお母さんはいなかにいきました。すると、いつも僕達がいなかにいました。(中略)お父さんは、悪かったといってあやまり、そして、お家に帰りました。僕は、また、幸福がきたと、

しあわせにくらしていましたが、一カ月たつと、またお父さんとお母さんとけんかをしました。僕はまた、びくびくしながら、みていますと、またお父さんがまた家からでていきました。一週間ぐらいたつと、僕をそうだんじょにやりました。僕はそうだんじょから、東京サレジオ学園にきました。」と綴る子供、又、「僕のお父さんは、僕が四、五才の時に、動物園や、デパートで、いろいろなものを、かってくれたので、お父さんの顔ぐらい、いまでも、おぼえている。(中略)お母さんがなくなってからは、お父さんの気持が、すっかりかわってしまつた。(中略)母が死んでから、一年も、たつたある日、僕は、東京のおじさんのいえにひきとられて、半年をすごして、東京の国分寺にあるサレジオ学園に入つた。入つたばかりの時は、お父さんやお母さんや、またしんせきの人などを、おもいだしてたまらない。」(二月二十六日朝日新聞所載)と悲しむ子供、こんな子供達が、毎日々々を過しているところが養護施設

設なのです。

子供達にとって、特に成長期にある子供達にとって、家庭こそ、最も自然な環境であり、又最も良い環境であるということにつきましては、現在、どこの国の心理学者、医師、社会学者等も、全て認めているところであります。しかし、現実には、父母の死亡とか、離婚とか、家出とかで、父母がいない、又どちらかが欠けている場合、父母があっても、棄てられてしまったとか、虐待されているとか、全くほったらかされているとかいうような場合、更に、何等かの拍子で迷子になって久しく分らない場合等で、父母の愛情に恵まれていない子供達があるという事実も亦、否定することができないのであります。このような子供達、いわゆる孤児、被虐待児、被放任児、浮浪児等に対して、家庭に代る環境を与えて、保護し、育成していく施設、これが養護施設であります。もっとも、子供達が、そのような状態になった場合でも、何でもかでも、すぐさま、養護施設に收容す

るかというところ、それでもありません。全く身寄のないような場合は兎も角として、他に伯叔父母等の保護者が居るような場合には、児童福祉司さん等が、その家を訪問して在宅指導をするという方法もありますし、又里親さんに、里子として養育をお願いするという方法もあるわけであります。

これらは、いずれも、子供は家庭において最も良く育成される、という原理から来て来る保護の方法に他ならないのであります。従って、養護施設におきましても、単に子供達に宿所を提供するという意味のものでは決してありません。家庭的な雰囲気の中に温く抱いて、このような子供達が、入所前に受けた不良環境から来る悪影響を取り去るよう指導致しますとともに、進んで明朗健全な生活環境を与えて、全人格的な生活指導をするという、家庭に代るところなのであります。とは云え、あくまで養護施設は家庭ではなく、家庭に代る環境です。子供達が帰るべき家庭が立ち直った場合には、子供達は一刻も早く、その家庭に

帰らなければなりません。又一方、子供達が成長して、国家社会の一員として、お役に立つことができるようになれば、子供達は養護施設を後にして、雄々しく巣立って行くのであります。かように、養護施設は、不遇な子供達にとって、云わば第二の家庭として、子供達の心のふるさとであるのであります。

養護施設に入っている子供達は全国でどの位いるのですか、皆んな元気ですか。

全国各地にある養護施設は、現在全部合せて、五二八ヶ所で、このうち、私立の施設が四一八ヶ所、県立とか市町村立の施設が一〇ヶ所であります。昔から有名な悲田院もその一つでありますし、かつて孤児院とか育児院などと呼ばれた施設も、今はこの養護施設として、公の制度の中に包含されております。仏教やキリスト教、更に新しい宗教の方々も、夫々の信念にもとずいて養護施設を経営しています。又、施設

の規模も大きさまで、数百人の子供達の世話をされている施設もありますし、三人、四〇人の子供達の面倒を見ている施設もあります。そして、現在約三三、〇〇〇人の子供達がこれ等の施設で、健やかに日々を送っております。その平均年齢は一三才となっております。しかし、このような養護施設に收容して育ててあげなければならぬ子供達は、全国にまだまだ沢山おられるでありまして、最近の調査ではなお約四万人の子供達が施設に入るのを待っているという状況です。

ところで、養護施設におきます子供達に対する指導はどうかと云いますと、申す迄もなく、家庭の処遇をするという基本的原理に基くものであります。最近の児童に関する心理学、精神衛生、医学等の諸学問の著しい進歩に歩調を合せながら、正しい養育の理論と技術によって、行われなければならないりませんし、従って、それに必要なだけの人的な陣容や物的の設備も具備しなければなりません。児童福祉法では、養護施設

設がどうしても守らなければならない運営とか設備についての最低の基準を定めております。例えば、職員につきましては、児童指導員や保母(施設でのお父さん、お母さん代りの先生)職業指導員、囑託の医師等を置かなければなりません。児童指導員と保母は、通じて子供一〇人について一人は置かなければなりません。又部屋割につきましては、子供の居室、調理室は当然必要であります。別に医務室や静養室、職業指導室等も設けるようにされております。

更に子供の居室につきましては、子供一人について、〇・七五坪は確保されなければなりません。その他細かい点につきましても、夫々定めております。こうして、お父さん、お母さん代りの先生の翼の中で子供達は基本的な生活習慣や躰を身につけて行くのです。勿論学令期の子供達は、附近の学校に通学し、学校から帰れば先生の指導の下に復習や予習に励みますし、余暇には、お話、音楽、絵画、スポーツ、社会研究等をし、この点では何一つ家庭とは変っ

てはおりません。又義務教育を終った子供達は、施設内に設けられた作業場で職業の指導を受けたり、或は公共職業指導所に通ったりして、技術を身につけるよう努めております。

社会保障制度の確立と云いますが、国や都道府県は養護施設に対してどんな援助をしておりますか。

憲法には「すべて國民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」(二五条)と定められています。従って、国は都道府県と共にこのような養護施設がその機能を發揮して運営されるのに必要な費用を負担することになっております。負担の割合は、国が八に対して都道府県は二であります。費用の内訳を具体的に挙げますと、子供達の毎日々々の生活に必要な費用、つまり食事

の費用、被服や寝具費、保健衛生費、日用品の購入費、学校給食費や教育費等から、施設の職員の俸給や建物の維持管理費等で、これ等を全部合算致しますと、全国五二八の養護施設のための費用が約一八億七千万円(昭和三一年度予算)となるのであります。

ここで問題となりますのは、よく社会保



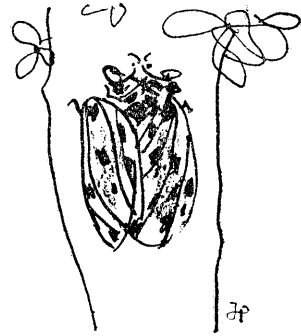
障費が国家財政全般から見ても少額過ぎると云われ、しかもその中でも子供達に特にしわ寄せがされているなどと云われますが、成程養護施設に關しての費用の項目は一応は揃ってはおりますが、その各々の費用が極めて少ないということでありませう。例えば、食事の費用は一日一人の子供について、六一円六八銭となっております。この中には主食の費用から味噌、醤油等の調味料の費用も入っておりますので、副食費としては一食約七円前後となります。その程度でありますと、ならして申しますと、子供の好きな卵は勿論購入できませんし、鯨肉以上の肉類は困難ですから、勢い魚肉が中心となります。間食費は全然計上されておりませんし、果物もちよつと無理となります。一三才児に必要な栄養基準量は、一日当り、カロリーが二、二七〇カロリー、蛋白質が八〇瓦、カルシウムが一、四〇〇睡となっておりますが、この予算でこの基準量迄追いつくには、施設の先生方は全く大変な工夫と努力があるのであります。

教育費を見ますと、これは各学年によって異りますが、例えば小学校三年生で月一六三円、中学生二年生で二九八円でありませう。これで教科書、ノート、鉛筆から上履等一切合切の学用品を需めなければなりません。参考書の購入費や修学旅行費は計上されております。これ等は、ほんの二、三の例ですが、かようにまだまだ到底十分とは申せませぬ。外国におきましては、家庭に恵まれない子供達に対しては、両親の下にある子供以上の経費を出しても本当の幸福は与えられないと云って、一般家庭の子供に通常必要とする費用の倍以上の経費を支出している国もあります。我が国ではもとよりこれに比べる訳にも行きませぬ。しかし、今後早急にこの面におきましても十分の配慮が加えられ、一般社会の人々の力強い協力の上に、「二〇世紀は児童の世紀である」という言葉が、一日も早く、養護施設の子供達に、生き生きと響くように祈らずにはおられないのです。

(厚生省児童局養護課長)

一年保育と 二年保育の 問題 (その六)

八坂富子



ので、比較対象する事例を持っていないことをおことわりして置く。

然し何年か前に奉職した園で両方扱っていて、どちらも一組を別々に編成している場合、組の雰囲気とか、生活のし方などに、かなり違いを感じたことがある。

又現在二年保育年長組に一人だけ一年保育児が混っているの、他の子供と比較して見れば出来ないことは無い。然し三十七対一であるから、組の計画は勿論二年保育としてたててあるし、只取扱の上で必要を感じた時に個別指導をするだけである。

又その子供が普通児であり

社会性の面でも順調な発達をしているので組の雰囲気にもすぐ順応するし、子供自身も他の子供との生活を心から楽しんでいる

ように思われる。他の子供よりも幼稚園の経験が少いために仕事の面で劣等感を持つということも見受けられない。時々集団行動が他の子供より一足遅れることがあっても、気がついた時にすぐついてくる。そして自分も足並の揃ったことをよるこび、友達も追いついてくれたことをよるこぶ。だから学級経営の上では問題は起らない。

○一年保育児(A)と

二年保育児(B)の差異

(一)学級の雰囲気や生活態度の差異

古い記憶を辿ったり、又近くは他の幼稚園を見せて貰って感じられることを挙げて見ると、

- A・活気が無い B・活気にみちている
- A・行儀が良い B・行儀が悪い
- A・自主性が強い B・自主性が弱い
- A・協調性が強い B・協調性が弱い

(二)中や深さの差異

幼稚園生活を長く経験した者と、短く経験した者とは一つの事項について、どれ

○はじめに

現在私の園では二年保育ばかりしている

だけの中や深さの差異を持つか実験を試みた。

私の園では前にも述べたように、三十七対一で行った時が三月の卒園も間近い日であった。一年間生活を共にして、二年保育児の生活に悉皆順応しているの、その結果は残念ながら予想したような差異を認めることが出来なかった。或はそれに加えて問題が適当で無かったのかも知れない。

○日時 昭和三十一年三月十七日

○場所 静かな部屋で個別検査

○問題・言語 絵を見て話す(キングダブツク三月号はるのはだけ 二面つづき)

「この絵のお話をして下さい。」途中で何も助言を与えない。

○条件 同条件の子供を選ぶ、二人共生活年令六歳九ヶ月。知能指数一三九の男児家庭環境普通。一年保育児(A)は教員、二年保育児(B)は商業

Aあのねあの、お百姓さんやんか、が、働きに、行って、子供たちも、行って、花つみしてる。空が、青い、それから、桜、梅も、さいて、いる。で、山羊が、

草を、食べてる。

B春が、来たけね、お百姓さんがね、一生懸命してね、子供が、来たけね、花をとってるの。男の子が、羊連れて来てね、草を、食べさせてるの。それから、男の子が、上を、見てるの。

このようにA児は十七文節、B児は十六文節、内容もほぼ同じことを話している。

(三)身体発育の上にあられる差異

前に述べた実験の結果から、こんなことも考えて見た。現在では日常の行動観察で、殆ど一年保育児であったということさえ感じられない程、ゆたかな生活を楽しんでいるが、一年前に、A児が入園した当時を考えると、集団行動の足並が遅れたり、又気がついた時に追いつこうとする努力や、そのために消耗するエネルギーも大きかったのでは無いか。

そこでその頃の両者の体重増加率並びに

	A 児	B 児
一年間増加	二・五疋	二・五疋
四月↓五月の増加	〇・疋	〇・五疋

一年間の増加率を比較して見ると次の表のようになる。

右の表のように、A児は四月↓五月にかけては停滞し、B児は月々順調に増加し、しかも一年間の増加率は両者共等しい。

(四)行動の特長

もう一つB児の体重記録から考えられることは、二期期のなかば過ぎ、十月↓十一月にかけて停滞している。この時の行動の特長として、幼稚園生活に自信が出来て、殊に遊具を使って外で遊ぶことに力が入ったようである。時々寒い日がおとつれる、十一月頃でも一人外へ出て元気に遊んでいる。友達が室内で仕事をしても、あまりそれに興味や関心を示さない。ぐったり疲れきるまで遊ぶ。その後段々に落ちついて三学期に入ると、全く他の子供と歩調が揃い、遊びの面でも仕事の面でもバランスのとれた好ましい生活が出来るようになった。

このようにB児は順調に進んで来たがA児の場合は波があった。B児も年少組の時には、このような波があったに違いない。

そして見るとA児とB児の中と深さの違いはA児入園当初の五月頃か、十月頃波はけしかつた時に実験したら或は差異があつたのではないかと思われる。

○結果に対する考察

前に述べたような、ささやかな観察や実験の結果から見ても二年保育の方が好ましいと思う。何故なら、卒園して行く時に両者の差があまり認められないでも、それまでに至る生活の一こま／＼が充実され豊かであることがあの時代の子供の仕合せであり、幼稚園教育のねらいだからである。重ねていえば結果より過程を尊重するからである。

○幼児の家庭環境から

考えられるもの

立場を変えて幼児の家庭環境を考えて見た時に、果して環境といふ両親の教育的配慮が充分なされているであろうか。

現在の日本の状況では、あの時代の子供が充分に遊びまはる空間も無い。又それを

望むことも無理である。両親も非常に忙しくて、子供に充分な教育的配慮をしてやることが出来ない。だから子供が順調な発育をして集団生活が可能な範囲では、そして親が経済的負担に耐えるなら、子供のためには二年保育の方が一年保育より仕合せだと思ふ。勿論対象になる幼稚園が理想的な教育の場であることを前提として、

○教育行政の立場から

未だ日本の全幼児の何割かしか、幼児教育を受けていない今日では少い施設は大勢の幼児が押しかけた時は機会均等の立場から一年保育が優先するのは当然である。

然し地区によってはかなり施設の普及しているところもあるし、きくところによると、人に政策の効あつてか、今年あたりから幼児が全国的に少くなるようである。

考えようによっては、一転換期にあるのかも知れない。

従来はとにかく普及徹底ということでは無い基準に達しないものもあつたのでは無いか。

幸い新しい設置基準も出る運びと聞いているので、この時に内容の充実に力を入れて新しい基準や教育内容に一步でも近づけて行き度いものである。そして余力あれば一年保育から二年保育へと手をさしのべるべきでは無いかと思ふ。

○むすび

最初にも述べたように現在両者比較の良い事例を持っていないため、明確な裏づけ無しに結論へ持つて行ったことを心苦しう。

これをお読み下さる皆様の御批判御指導をたまわり度い。

(広島大学教育学部附属幼稚園)

× × × × ×

蒐めた幼稚園史料

編集部

今までにこの「幼児の教育」に時々昔の幼稚園とか或は思い出とかいふ記事を掲載した。これは日々の保育にすぐにくくたつというものではなくて、何か新鮮味のかけたような感みが無いでもないが、読んで見て内容をよく知るとなかなかどうして、得るところが大きい。これらの記事にあらわれている保育の内容の少々、此の理解の度合い、親達の考へ方、又はそれぞれの風俗等が詳細にかいてあつてこれを現在の実状に合せてみるとそこに発達段階がありありと知られる。そして今全国の幼稚園関係者が必死になつて勉強し実行し、努力し工夫していることが五年先十年先、五十年百年にかけてよりよく活かされて日本の幼児教育のますます輝しくなつてゆく将来を思う時、やはりふりかえりみた現在過去の保育状態の記録は共に大きな意義が生れてくるということを深く感じた。

これからここに掲載する記録はみんな歴史の古い幼稚園の史料である。日本幼稚園協会がかねがね集めておきたいと思つてきたが、創設以来八十周年にもなるこの機会に各地方関

係者にお願ひの手紙を上げたところみんな喜んでお返事を下さつた次第、こちらとしてもこれで手がかりを得れば又段々手繰つてもみたいというわけで、年代もとびとび、内容も一貫しているとはいえないが、これら生きた史料は日を逐うて貴いものに価値つけられることはたしかであろう。

これらを読んでみると、わが経験を通して自分の心の中で一まず歴史に綴られてくる。それを諒とせられたら幸いと思ひ、ここに集つた中から年代順に並べ寸筆を加へ掲載した。

明治十二年頃

第一回幼稚園卒業生の思い出

岡積利兵衛

私は明治十二年七月鹿兒島に初めてできた鹿兒島女子師範学校附

属幼稚園の卒業生です。その時の入園許可証と入園料金五十銭の書類をそれから進んだ学校の証書と一緒に保存して居ます。

私は明治八年秋に生れてかぞへ年八十二才になります。

……中 略……

幼稚園時代の思出はまた昨日の様にまばらながら目前にちらついで来ます。

何十人であったか確かなことは覚えませんが後に大臣になった渡辺千冬氏も同窓の一人です。千冬氏のお父さん（千秋）は当時大書官で来られ第三代の知事でした。

明治十年役が終って日の浅い時ですから封建制の強い頃で士族平民の差別が厳しく、町内が異って居てさえも嘘みあって居ました。他県からきた上役人の子弟が数人加わって当時二、三万しか居なかつた市民の内から限られた家庭の子息の集りであつたのです。

私の家は父が明治八年から度量衡製作業をはじめて居まして県下唯一の製作所でした。県庁や地方人との出入が頻繁であつた勢もあつて、種々な勢力の集合地帯であつたようです。私の友達も家にはそれぞれの型なりに集りました。他県人をヨソモンとみくびつたり、地方人を田舎者とけなしたり、町人を「マツニン」とみさげたりした環境から無風地帯におかれて居まして至極なぞやかでありました。幼稚園でも私共の仲間はおとなしいものばかりでした。

先生は今も同じ様に女の先生でしたがその一人に豊田先生と云う年とつた方がありまして東京から来て居られました。しばらくしてやめられましたが汽車の無い時ですから海路汽船でゆかれました。船が沖合に泊って居ますので艀船が通いました。私共園児は父兄と

海岸通りの船問屋の二階から御見送りました。

幼稚園では授業の初めと終りには拍手木（長方形に木を削り二個相打ちでならずもの）が鳴ります。カチカチ鳴ると集りカチカチ鳴るとおわります。其度に園児は一緒に出遣入りしました。先生が先頭にたつて私共の方を向いて手をたたきながら列を組んで先生の拍手に揃へて歩きました。

唱歌を教わる時は楽器はなくて先生が手拍を打って歌を唄って下さいますと知らず知らずおぼえました。

今の幼稚園で歌われて居る歌があると思いますが、

ひらいたひらいた蓮華の花開いた……

ここなる門は誰の門……

雀雀おやどはどこかチュチュ……

風車風のまにまにめぐるなり……

桃から生れた桃太郎……

等おそわりました。

園庭で遊戯もしました。まるく輪をつくつて、しゃがんだり、たつたり、一人の先生が、真中に居て他の先生が園児の間に居て唄いながら手足をおどらして居ました。

手工は紙細工、豆細工、粘土細工等がありました。

その頃は遠足や運動会はありませんでした。先生は皆和服でした。私共は和服で幼稚園と太い焼印がおされた小さい木札に名前が書いてあるものを帯に結びつけて居ました。

……後 略……

（鹿兒島市磯）

〔説明〕 八十二才の岡積さんが、幼児のころ船で旅立ちの先生を船問屋の二階から見送ったことが書いてある。これは豊田実雄先生と思う。お茶の水幼稚園を創設されてから明治十二年鹿兒島県令の囑により同地に赴きここに幼稚園を創設し完了の上、再び東京に帰任されたのであるからそのお別れの情景が、はからずも思い出に強くのこつたらしい。

明治十八年頃より二十年頃

大分県杵築幼稚園のこと

河合多留

杵築幼稚園は本年七十周年と相成り（明治十八年創設）先年六十五周年記念式を催し私も御案内をうけ園長より何か懐旧談をという御依頼をうけ昔開園の時御家老末亡人と保姆に御就任を願ひ河合精一郎よりそれはそれは御立腹いやしい町の子の守をなどと御叱りをうけし珍話や此外昔の微々たる保育の模様等を御話し申し来会者御一同大笑いされども県下一歴史は古く候。

明治廿八年に始めて唱歌と名のつく歌を幼児に教え度、町長に幾度も幾度も願ひようようペーオルガン一台備へつけて幸ひ私は音楽が通も好にてバイオリンとハンドオルガン（只今のアコードオンによく似た小さい楽器です）此二品を幼稚園に持ち行き幼稚園唱歌集を求めて日々遊戯や歌を教へ候又息物はほんの僅かに購入下さる

事として間に合い申さず砂を運び入れ女の子には箱庭を作り又男児には相撲場を作り、羽子板を大工に造らせ羽子は手製なし男児は凧を作りて遊ばせ屋敷から粘上を掘って持ち行細工又提灯屋にて竹を求め大豆と共に細工、色糸針を持参し縫とりをなし一定の遊戯は歌に振りをつけて舞踊のまねなど実にお恥かし事なれども町民によう幼稚園の認識を高め幼児の出席非常に多く相成母姉等時々幼稚園参観に来る様に成り精一郎通も喜び候折紙貼り紙凡て原料なき為紙を赤黄等に染めたり切つたりの手数それはそれは忙しき事にて

……以下略……

* * *

明治二十二、三年頃

幼稚園保母の免許状

海老名モト

……前 略……
四十余才の母は若き方々と共に近藤幼稚園保母練習所に通ひ居りました。

明治廿五年九月付にて

証

海老名隣子

幼稚園保母練習科卒業

近藤幼稚園保姆練習所長 近藤 浜 印

を頂き園にては

福島県管内にて幼稚園保姆たるを免許す

福島県知事 日 下 義 雄

……以下略……

(山口県萩市平安古樋ノ口)

〔説明〕 靈南坂教会の近くに開かれた赤坂幼稚園より筆者の母上は麻布幼稚園を受け継がれた。この人の保育を学ばれた近藤保姆練習所長近藤浜さんは、松野クララ、豊田英雄両先生方と幼稚園の創設に当られた一人である。保姆養成機関の稀であった時代海老名さんは正規の保育学を学ばれた。その後会津若松幼稚園も創められ、母子二代幼稚園教育に尽された功績は大きい。

明治二十二、三年頃

愛珠幼稚園が保姆の実習所

芹 沢 イ ノ

……前 略……

私は元大分県速見郡杵築町士族阿部正利三女以納として、生れは明治四年十月六日でした。十九の年に結婚、大阪に出て主人は警

察、私は其当時市参事会の主催にて保姆養成所が出来、中の島第一高女の附属として場所は東区今橋三丁目元鴻の池の古家に愛珠幼稚園があり、その二階が広く教室にあてられ、開所式は明治廿三年四月一日より、廿才の春第一期生として入所、廿名位なりしと思います。課目は教育、博物、音楽、倫理保育法等でありました。主任先生は東京高師より春田隆子先生、保育法音楽手技のお受持、橋本先生で、二年間の予定が一年半に縮められ、春田隆子先生は廿八才の方でしたが其御親切なる温顔は今も心に残って居ります。其時の服装は丸まげに帯、私共生徒は皆いちょうがへしのかみと和服、冬は一寸すそふき四尺角の毛布を二つに折り、こぶまき的に肩から身に巻き寒さをよけるものでした。実習所は手許の愛珠幼稚園でしたが幼児も皆和服長袖輪に、民草等踊る時はとてもきれいに感じました。楽器はピアノ大形長三角形にて三本足に車つきオルガンは養成所であり、交たいで練習するものでした。私共は市費で育てられ市内二三年の義務があり、それをすませて思い思いの所に行くものでした。

……中 略……

……深処に専門の先生より造花等も教わりました。一年半、明治廿三年に始り廿五年に終り卒業式の時服装は皆高島田に髪を結いすそ模様の晴衣を着て写真を撮りました。卒業後はそれぞれ市内幼稚園に配布されました。其時の月俸は大七円と小六円でした。私と言田さんと二人は市の西区靱町(魚市場の町)小学校附属幼稚園でありました。其時の校長先生は絃楽の(琴、月琴、丁琴等)を好きなた方にて佐治春寛と言う方でした。私と言田さんは校長の前に机を

置かれて居りました事を覚えて居ます。組は二組、保母は二人、助手保母一人、皆で三人。大阪は昼は御飯たきがあり、幼児はあつき湯気の立つ御飯にお魚のおかず等、女中の持ち来りて……

……以下略……

(鹿児島市上荒田町二一七四)

〔説明〕 大阪において郡の保母養成所に入り、つづいて幼児教育に従事したことが当時の風俗もうかがわれて面白い。

* * *

明治二十八年頃

神戸善隣幼稚園のこと

青木松

明治二十八年、今から六十二年も前です。神戸の様な時代の先端を行く都市でさへ託児所とか保育所と云う様なものはなく幼稚園と名づけられるものは二つか三つしかなかった程です。比較的文化施設が少ない東部神戸に可成広い日本家屋を借り幼児教育にそしてそれにつれて愛の教へをと計画したのが今は亡き宣教師 R・A タムソン夫人でした。何しろ外国夫人の園長保母二人に伝導師同行四人の苦難の道が始まりました。名も善隣幼稚園として。

「子取り」で騒がれていた當時の事です。まして六十年前ですもの

今でこそ笑い話の種ともなりましようが当時としては募集に説得これ努めたものです。

曰く「異人さんが子供をさらう」やさしくすればする程気味悪がって、尚警戒すると言う時代ですから並大抵の苦勞ではありませんでした。万全を期して子守がお供でついて来ると云う始末、こちらも考へて将を得んと思へば先ず附馬をとばかりにこれら恵まれない子守達に読書、裁縫等教へ始めました。

不思議でも奇蹟でもなく誠意と云うものは有難いもの、日ならずして幼児は幼児、子守は子守の部屋で結構それぞれ興味と知識に満尼していたものです。

(神戸市長田区大丸町三ノ一四)

* * *

明治三十年頃

番町幼稚園・城東幼稚園など

脇屋なを

明治卅年麴町区番町幼稚園任命月俸六円給与其後日本橋区城東幼稚園に就任

明治卅四年頃の幼稚園はお土産と申しまして毎日手技を作らせました保母は幼児帰宅後下準備にせはしく例へば剪紙を貼らせる為前日につや紙の裏にアラビヤ糊の引いてあります十せんち位の紙を三角に摺み保母が鉛筆で線を引いて与へますと子供が缺で切り取り手本の通りに貼ります。

豆細工の時保姆が泣かされます。豆の漬方が悪いと崩れましてあちこちで、こわれましたと申し困った事が有りました。

其後お土産も毎日でなく一週に一度位になりました。

私の知っております一番古い唱歌

我子よかれと父母は寝ても覚めても祈るなり

善き子になりて人の子は親の心をやすめばや

毎日朝会集がありまして歌ったものです。

土地柄富裕の家庭が多く使用人多きため子供の独立心が乏しいと園長の意見で入園後一週間附添人を許可致しました中には難物も有りました一人でも離れる子供が有りますと保姆は飛び立つ様に嬉しく他園の方が能く離れますねと申されますが保姆も一生懸命努力いたしました。

幼稚園の発達も時勢に伴い追々發展日本橋区に置きましては大正三年独立経営の幼稚園設立専任園長就任されました独立幼稚園は東京市では最初でした。

大正十二年関東大震災の時園舎は焼失恩物もなく日々を過しておりました折柄大阪より数々の送り物中に大きな積木長さ九十センチ巾八センチ三角四角其他沢山御恵与下さいました。幼児等は大喜び保姆一同は有難く感謝致しました。

大正十四年、出張費が出る様になりました。近県保育視察をさせていただきますました。静岡迄参りました。区内で二名これも区としては初めてです。

昭和二年園長ノ発言で春秋遠足の外自動車を利用、全幼児は二組に別けましたり或時は一組丈を連れて参りました。現在の様に交通

類ばんで有りませんでしたから外出して自然物に接し又空気の良き所で自由に遊ぶ事が出来ました引卒者は責任が有りまして帰園致しますとほつと胸をなでます。場所は小石川植物園、上野動物園、浜松町恩賜公園、日比谷公園等でした。

日本橋区の幼児は環境上土に親しむ機会がありませんからせめて鉢にでも草花を育てたいと思ひ各児に一鉢つつ名札をさし成長の早い鳳仙花を植へさせました。苗は保姆が作り子供等に交対に水を与へさせ一鉢でも花が咲きますと楽しみに毎日自分のを眺め楽しんで居ります。大抵毎年続いて実行いたしました。

幼稚園も大いに進歩致して参りました。区内丈の主任会は毎週一回会合し研究致しました。

委員会は各園一名で話方遊戯唱歌手技等分担して研究しました。

……以下略……

* * * (東京都品川区荏原四ノ一七五)

明治三十四年頃より昭和初期まで

高浜きみの

(本誌五十五卷七月号掲載「昔のこと」)

明治三十六年頃

大石雪枝

(本誌五十五卷六月号掲載「想い出」)

明治三十八年頃

平戸幼稚園の開園当時を偲びて

千浦治子

……前 略……

元来私は保母教育をうけたものでもありませんが平戸婦人会で幼稚園を設立希望があるというので畑ちがいの私に白羽の矢が立ちまして今考へますればよくも御引受いたした物と思ひます。若き日の無鉄砲と申しましようか早速長崎師範の附属幼稚園におけい古に参りました。明治三十八年六月六日より七月十五日迄同園主任杉野香久代先生に幼児保育法の御教授をうけまして速成保母ができたわけです。第一オルガンのけい古もしなければなりません開園の時迄毎日の様に小学校の或先生の御宅にオルガンの勉強に参りましてやっとうやらひけるようになりました。誠に急ごしらへの主任保母ができたので御座います。

八月某日から開園いたしましたところ百二十人の幼児が入園致しました助手の古莊さんが小さい組を、私が大きな組をうけもち保育の任に当りました。外におばあさんの方が一人世話役、其れに小使のおばさんと計四人で世話致しました。ポロポロの借家でガラス戸もありません風は吹き通してまるで修練道場のような処へ百二十人もどっとおしよせてきたような始末でそれこそ途方にくれる状態でした。

た。時々婦人会の方や小学校の先生方が御越し下さいまして御鞭撻して下さいました。下手なオルガンをひいて師範で習って来た様にかかじかみ、しかし火鉢があつたかなかつたか覚へてません。とにかく皆を腰かけさせて先ず手をこすらせませす。そして積木だハリガミだ何だ彼だといろいろの事をさせるのです。休みの時間になると大きい男の子等は角力をとりませす。制したって仕方ありません傍観してました。

数人は中途で止めました。おしっこをしたのはずかしいとやめた女の子。武士の子が町人の子と遊ぶのはいやだとやめた男の子もありました。実に封建的な土地柄です。そんな時代でもありません。先生は袴をはいて靴をはき子供らは勿論和服です。写真がないのが残念ですが十人計りの男の子は毎朝私の出勤の出迎へに一丁余りの橋の側迄ラッパをふいてまいります。とても可愛いものでした。時々遠足につれてまいります小さな町ですが日本最初の外国貿易地オランダ商館イギリス商館などのありましたところ昔は戸数千軒といわれた町で入江にそうて商家が立並んでいます。其所を一巡いたします時一番幼い子供は自分の家の前を通りますとお母さんにすりすりついてお乳をのんだりしてました姿が目の前にうかんできまいります。卒業式の時など私も感きわまつた事ですが一人の子供は飛出して来ましてすがりついて泣きました。今は町の為にと東奔西走いたして居ります。実に無秩序なノンビリしたものではありませんが幼児の心には深く、深くくいこんだらしいので、私がやめまして他にまゐり五年後に帰りました時には十人計りも年賀にまゐりました。

其うちの數人は四十年後にも尚わすれずに愛のもてなしをもしてくれました。五十年後の今日も尚覚えて数日前態々静岡から訪ねて来た五十八才の老紳士もあります。爾來春風秋雨五十年今や平戸幼稚園は伊藤先生の御奉仕で見事に成立一度參觀に参りましたが見事にととのった幼稚園となりました。誠に有難いことだと感謝いたして居ります。

昔物語り夢物語り御笑草迄に認めました。

(東京都杉並区阿佐ヶ谷五ノ六一)

明治四十年頃

佐藤満寿

(本誌五十五卷五月号掲載「在学中の思い出」)

明治四十三年頃

水間クマ

(本誌五十五卷六月号掲載「その頃のこと」)

明治四十五年頃

お茶の水と私

竹居ふじ

お茶の水と私

明治四十四年四月武田錦子先生に連れられて、附属幼稚園へ、時の主事は藤井利智先生、私は福建省の女子師範保姆科を、受持つ必要上、いろいろ便宜を計って頂いた。

翌四十五年九月から、お茶の水の職員末席に連った。主事は安井哲子先生、他に雨森訓子先生、井村くに、池田豊、岡部屋世の諸部の方につとめました。其間井村さんの代りに、伊藤梅さん、岡部さんの代りに、相馬さん、雨森先生の代りに樹下さん、樹下さんの代りに、杉本さん(現園長及川ふみ氏)私の代りに小高さん、其時代でした。

初めの六年時代は、私の長い生涯の中で最もうるわしい時代でした。

庶務係に井村さんと安井先生、園芸係に池田岡部の二人、この二人は鍋島農園へ実習に行つて蔓バラの苗を買つて来て、園の花壇の周囲に植えたら、翌年には見事に薄桃色の八重、白の八重、一重の縁取りなど咲いた。やがてそれを切つて、大きな盛り花として遊嬉

室に飾り、皆で楽しい集会をして、帰る時分けて頂いたが又蚕豆を作って皆して、試食したりした。私と雨森先生とは雑誌「婦人と子ども」の会計係をしたので、雑誌の発送やら入金の際帳などで、全国の園名、保母名も覚えた。何しろ、北陸館から雑誌が来る迄に包装紙をかく、包む局へ料金代金代納で持って行く、中々忙しい、其他此幼稚園には、実習科の生徒、諸園の参観人、本校の教生が来るしフレール会の例会、大会等々で、いつも月を仰いで帰る。

お雛祭の時は、小使室で、おいをいってお砂糖にころばしたり、紙箱を沢山作って入れてやったりした。

安井先生は、冬など職員室へ帰って見ると皆のお弁当を、スチーマの鉄管の上へ並べておいて下さるし、或時は遠く家郷をはなれて居る私を可哀相だとして、お食事と呼んで下さったり、今何を勉強して居るか、心配して下さったりした。雨森先生は女らしい気のつく方で、私の脚気の時など、小豆と麦とを牛乳鍋で煮て、午後私にたばさせて下さったり、おいしいお料理を半分ずつ分けて下さったのを、今も涙して感謝して居る。何しろ雨森先生は小笠原家の家庭教師であり、御自分の甥姪の教育もあるのでいつもお忙しい、友人の芦花夫人の順天堂病院に入院中や、甥の晋さん、姪の槇子さんの入院から病死の頃など、私は二部の三才一五才迄混合の六十人を、一人で何とかやっていた事など、今から思えば無謀も甚しいものであるが、一生懸命張り切って居ったと思う。

保育の内容

保母の日課、朝の拭掃除、お花の水かえ、幼児のエプロン代え、会集、各要目の何かをする。自由遊び、お片付、手洗い、食事、う

がい、自由遊、其間に先生食事、午後の集り、エプロン代え、二時お帰し、小使掃除、先生は記帳、実習生又は教生指導、明日の準備受持事項につき研究、要目中には観祭、談話、遊戯、音楽、手枝手枝の中にはフレールの積木、環、貼り紙、剪纸、撃き方、縫い方、画き方、折紙、摺紙、粘土、豆細工、等がありました。

木曜日が粘土で、高橋という小使が律気者でねって棒にして幾本かずつ組分けして、くれました。豆細工は金曜日で矢張高橋が用意しておいてくれるので、竹ひごと小皿にもった豆とを争へると、飛行機だの、彌次郎兵衛など、よく作りました。

其頃の幼稚園界

東に倉橋先生、西に橋橋浅太郎先生が指導して居られ、其他東京府立の日田推一先生、奈良の森川正雄先生等指導して居られました。保母養成所は、実習科と、府立と、長崎の活水、広島の高美、仙台の何とか位、其後ベラ、アルウィンさんの玉成が出来たと覚えて居る。東京では府立出の園長さんや保母さんが多く、大阪や神戸には他の出身で、実力のある、徳の高い、園長さんや、保母さんが多く、物資も多くて、優秀な成績を挙げて居られました。

其頃のフレール会

安井先生、野口幽香先生、倉橋先生等々主導的地位に居られ、小向さん、福田さん、山下さん方の意見を呈して、例会の主題をきめ年に一回大会がありました。

講師には、中川謙二郎、小西行直の両先生が近族結婚について話された事があって、両先生は極親しい中ではあったが、中川先生の御家庭を知って居る私共には、お気の毒で、まともに顔が上らな

った事を覚えて居ります。

倉橋先生の心理学、菅原教三先生の美学、土川五郎先生の律動遊嬉、久留島武彦先生の談話、梁田貞先生の童謡、大島正徳先生の倫理、富士川游先生の精薄児について、永井潜先生の心理学等々でした。

其頃の誌上にはモンテッソーリの感覺教育がとり上げられ、フレール伯の象徴主義が、追われて、自発活動を尊重しろと大に叫ばれ、テストが盛んに行われ、京大の心理研究室あたりからも、いろいろ資料を呈されて幼児体位の標準等も追々と出来る機運に、向つて来、文部省の夏季講習会が年々あり大正四年八月三―五日迄女高師講堂で中川校長が議長となつて幼稚園関係者大会が開かれ、全国から優秀な保育関係者五二六名が集まつて、

一、文部省諮問案

1 保母養成の適當なる方法

2 幼稚園と小学校との連絡に関する適當なる方法

二、建議案

1 保母の資格を正教員と、補助保母の資格を準教員と同等ならんことを請う

2 小学校令施行規則第二〇六条の幼児数を三〇〇人以下とし、併に同第二〇七条の保母一人の保育する一組の定員を約二五人以下とし特別の事情あるも四人を超過するを得ず、但し定員三〇名以上なるときは補助保母一人をおくものと改正せられんことを請う（時期尚早で延期）

3 公立幼稚園長及保母には市町村立小学校正教員の受くる隠退料

及遺族扶助料並に年功加俸、住宅料、免許状共通等の特典を同様に授けられんことを請う

三、研究問題 第一、二、三

1 満三才より始めるか四才から始めるかの適否

2 幼稚園に於て幼児の身体發育に有効なる手段

3 幼稚園各組に於ける各保育期に割り当てる手技手工の種類

其後私は大連幼児運動場に行き、関東大震災後は麴町富士見町高候爵邸内で罹災者の子弟を集めて保育し、現在自宅でささやかな、保育園を経営して居ります。

（山梨県東山梨郡牧丘町）

明治時代の幼稚園

アームストロング

明治時代の大方の両親は、子供が幼稚園で半日の訓練を受けるよりも、子守の脊中に、くくりつけて家の中や町を歩かせる習慣を持っていた。そこで子守達の、一番好ましい集合地は駅であった。ここで子供の注意は激しい騒音と出たり入ったりする汽車に向けられる。高い下駄をはいて髪の毛をふり乱して、時には脊の子がそれを口に入れており、又、子供も子守も鼻をたらし、手を汚し、度々、

昆布や、あめをしゃぶっていた。

然し、確かに或る母親が言うように子守の給料はやすかった。食料と着物丈位で朝から晩迄子供の面倒をみてくれる。幼稚園は半日ずつ週六日であるが、その外は母親の手をとること大変である。

こんな具合で、幼稚園を利用する理解ある母は少ないので、そんなお母さん方に母の会で遭うという事は非常なよろこびであった。もっとも母の会も時には二人という事もあった。

こんな風で最初の幼稚園も畳の室で開いた。ミッシヨンから、本当の幼稚園の建物が贈られた時、テーブルと椅子がはいった時、園児達は大変嬉しそうであった。

初めて小さい椅子が運びこまれる時、園児の一人はあまりの期待に一晚中眠らず母親を起して最初の椅子運びを見たそうである。

第一にベビーオルガンが備えられた。軽井沢の幼稚園大会で、旧い教師の一人が自分は、最初は畳の室にはさみと二三枚の古新聞しか教材がなかったと申されたがその通りである。子供達は着物を着ているので遊戯を教えるのは困難であった。幻燈は美しくなかった高い下駄をはいているので幼稚園の行き帰りには何度々ころんだものである。適当な下着類が定まったのは大きな事だが後日である。

最初の月謝は月五十銭であった。

段々にあがって二円になった時、高いと言って止めさせた親もあった。或る汽車の客は、幼稚園では毎月二円ずつもとるから彼の西洋人、儲かる筈だと言ったそうであるが、現地の宣教師、仲々、支出が多いのである。

幼児に牛乳を与えるという事にも、非常に年数がかかった。

牛乳は赤ん坊や病人が飲むものと主張する。故に、冬は肺炎、夏のコレラ等で幼い生命が奪われた事は統計上、非常なものであった。毎年学期初めに幼稚園の先生達は雨や雪の中を、家から家に園児を募集して歩いた。苦勞な仕事であった。

開園の日にはいつも手いっぱいの子供等が与えられたが、幼稚園の前の入園の案内は入園式を超えてはるかに立ちつづいたものである。

(富山市総曲輪二七四)

〔説明〕 私達はたまには幼稚園がこんな時代を通ってきたのであるということも思ってみるのも必要ではあるまいか、もっともこれだけで明治時代の幼稚園を全部語ってあるというわけではない、すでに立派な幼稚園が全国に出来ていて、わが子が熱心な先生に保育されて幸福を感じる親達のあったのを知っている。然し一方にはたしかにこの記事の通りの事実が方々にあったであろうということもうなづかれる。こうした有様に心を痛めいろいろの困難にうちかかって、よくわかるように親を導いてゆき追々と幼児教育を受けさせようという気持ちにもって行ったその時代々々の先生達の功績を思わずにはいられない。

現在のありさまを思うにつけても、この記事がなかなか意義の深い記録であることを思つて見直して読んで頂きたいと思うのである。

× × ×

楽 器 あ そ び

村 井 ト ミ

なること。

○自分の扱う楽器に責任をもって、皆で協力するということ。

○リズムに合せて、次第に正しく打てるようになること。

右の五つの事が言えると思うが、大切なことは、一般に合奏という形になるとむづかしい教材を与えて、技術的な練習にとかく骨を折りがちだということではないだろうか。特に何かの集会で合奏をするとなると、最初から受持の楽器をきめて懸命に練習し、当日その子どもが休んだりすると困ってしまったというようでは何の為の指導であろうかと考えざるを得ない。

こちらの目標をもっと低いところに置いて練習に汗をかかないでも、子どもたちが喜んで遊び、美しい音で、正確に打つということに注意をほらいたい。

又、みんなで心一つにして合奏すれば自分たちでも思いがけず美しい合奏ができてうれしいことを知らせたいと思ふ。

又最後にあげたように、正しく打つということは、簡単な曲を、ゆっくりでいいから、できるだけ正しく打たせたいということであ

る。

二、どんな種類の楽器をあたえたらよいか。

数多くの楽器をとり入れているところもあると思うが、ハンドカスター、タンバリン、トライアングル、鈴、大だいこ、程度が最も適当ではないだろうか。拍子木などは入れてもよいが、小だいこ、シンバルとなると相当高度になる。これも年令的に与え方があると思うが、私の経験からは次のような順序がよいのではないかと思う。

三歳児 二学期頃よりハンドカスターをあたえる。

四歳児 一学期からカンパリンを入れていく、三学期頃より鈴を入れる(四歳で入園する場合は三歳に準ずる)

五歳児 一学期からトライアングル、二期から大だいこ、三学期には伴奏としての子どものピアノなど入れてもよいと思う。

三、各楽器の割合(編成)はどの位がよいか。
ハンドカスターいくつにタンバリンいくつというはっきりした規定はないが、要するに合奏が美しくなるように決めればよい。狭い室、広い室などと室の広さにも関係するだ

六月の実地指導研究会で、子どもと楽器あそびをして遊んだので、それにも関聯して、幼児にはどの程度の楽器あそびをさせたらよいであろうかということをもとめてみよう。

楽器あそびといっても、ここでは簡易楽器のあそびである。

一、指導のねらいをどこにおくか

○楽器あそびをたのしむようになること。

○誰でもがどの楽器でも扱うことができること。

○美しい音、美しい合奏に関心を持つように

ろうし、楽器の編成によっても音が美しくも、きたなくもなると思う。

子どもたちに楽器を与えて打たせてみるとよくわかるのであるが、タンバリン、トライアングルなどは数が多いところさくなるし、鈴などは相当多くても美しい。大だいこなら一つでよいであろうし、ハンドカスターも数が多い方がはつきりしてよさそうである。

理想的ではないかもしれないが、私の組での編成の一例をあげておくことにする。

大だいこ

一

タンバリン

三

トライアングル

三十五人

二〇〜二二

三十五人

三十五人

四、編曲

製作や動きのリズム同様に、楽器あそびも声を大にして、易しく、易しくと言いたいところである。曲は短い、リズムのはっきりした、感のよいものを選び、リズム型をなるべく簡単にして、子どもたちにすぐ理解のできるように編曲するべきだと思ふ。年少組は勿論、年長組でも一、二期の頃は先生が編曲する。年長の三期頃は、先生が原案をも

っていて、或程度は子どもたちに考えさせてみたい。(楽器を与えて) この頃には相当耳もでき、美しさの比較も感じられるようになるので、無理のない程度にしむけていくことも必要と思ふ。

五、実際にどのような指導をしたらよいか。

○まず導入できるような環境をつくっておくことであらう。

保育室はいくつかのハンドカスターを日頃から用意しておき、自由あそびの中で使わせるとよい。年長なら幼稚園ごっこなどして自由に遊んでいる中でうまく取り入れられる場合もよくある。年少ならただ鳴らして喜んでいるだけでよい。又何かの機会での他の組や先生たちの合奏をみるのも環境の一つと思ふ。

○曲は最初は子どもたちの耳なれた知っている曲を使う方がよいと思ふが、年長の場合には新曲で反応してみることも折々必要だと思ふ。

次の年令によって特に強調したい面をあげてみよう。

三歳児

○子どもたちを集めて、さあこれからはじめ

ましようというように楽器を与えるのでなく、子どもたちの遊びの中に楽器を入れていきたい。遊びをよく観察していて、適当な時に楽器を取入れるとか、先生の方で遊びを意図してその中にハンドカスターを使うとか、例えば、汽車が急行になったらハンドカスターを打ってあげるとか、ピアノに合せて歩いていてハンドカスターが鳴ったらいそいで椅子に腰をかけるなど、考えればいろいろあると思ふが、いかに面白く生活の中に流すかが、特に年少組の時の大切な導き方ではないだろうか。

最初は勿論正しくは打てないが、だんだんに正しく打つようにしむけ、これ以上の楽器をよくばららないでいいと思ふ。

四歳児

○四歳児でも新入園の場合は三歳と同様に這入っていききたい。

○三歳一年を過ぎた幼児だったら、そろそろタンバリンをあたえてみよう。

このように新しい楽器を与える時には一応打ち方や持ち方を説明して、あとは室に置いておき満足できるだけ使わせるとよい。この時にやかましいからおさえてしまふ

と、かえっていけない。

○一曲を細かく区ぎらずに、一曲全体をハンドカスターにしたり、或はタンバリンにしたりする。

○せいぜい二種（三学期には鈴を入れて三種）の楽器で、曲を二分、又は三分する程度の分奏、又は合奏にとどめたい。

○併せて将来美しい合奏ができるような基礎打ちを日頃からしっかりと身につけるようにしたい。

四分音符

八分音符

二分音符

けたもの

など 強弱、遅速、拍子打

これらのことは動きのリズムで、リズム感を得ずと同様に進めていくわけだから大した苦勞や無理がなくていくのだと思う。

○更に腰かけて打つだけでなく動きのリズム

にハンドカスターをとり入れるとよい。歩いたり走ったりする時に使ったり、小鳥の曲で飛ばせて、小鳥と小鳥が話をする時だけハンドカスターを打つというように、動

作の一部分だけ使ったりしてあそぼせると一層興味を持つ。

五歳児

○四歳につづいて基礎打ちの応用範囲も広くなり（例



など）全音符（○）

簡単な休止符（○）

など）位はできる。又リズム打も相当しつかりとさせたい。

○五歳ではトライアングルも、大だいこも這

入って、どうやら合奏らしい形態もできるようなになるので、ここで新曲から合奏までの指導を一通りあげてみよう。

新曲より合奏まで

まず新曲を何度もきかせたい。曲に合せて好きなように拍手したり、体のどこかを叩いたり、小さくハンドカスターを叩いたりしながら聞かせる。

×大体曲がわかったら、皆で一緒にしっかりと打つてみる。

×子どもたちが自由に打った中から、種類の違う打ち方をとりあげて皆で打ってみる。

×タンバリン、トライアングル、鈴、大だい

いこなども与えて、交代に打つてみる。

（曲全体を通して）

×全楽器で一緒に合せてみる。

×終始全楽器の合奏では美しくないので、交代に打つたり、楽器の組合せを考えたりしていろいろに打つてみる。

×どの楽器を組合せたのが好きだったか。

どれとどれの組合せが美しいかななどの話題を投げて、先生と子どもたちと相談しながら合奏をする。

×一番皆の美しいと思ったものを決めて、楽器を交代してあそぶ。

○二学期の末頃から子どもの指揮が這入って来よう。

○三学期頃になったら子どもの伴奏を取り入れてもよい。こんな時は先生も子どもの一員に加ってするのもいい雰囲気であろう。

○ハンドカスターを面白く動きにとり入れてあそぼせる。

例一親とりとひよこ

（二人組で親が呼ぶ時、ひよこが答える時などハンドカスターを使い、他は自由表現）
例二でんでん虫

（二人組で、一人の子どもがでんでん虫の

まわりをまわって話をする時だけハンドカスターを打つ。でんでん虫が角を出す所など自由表現。又、ハンドカスターの鳴き方にでんでん虫がついて歩くのも面白い)

以上、狭い経験の中から記してみたのだが結論としては、楽器の技術的な練習に苦しむのではなく、簡単に、美しく、いかに、たのしく子どもたちの合奏、子どもたちのあそびとしていくかということに重点をおくということを変更して強調したいと思う。

(お茶の水女子大学付属幼稚園)

競 争 あ そ び

村 田 修 子

幼児が競争あそびをする場面を考えると、そのもつ意義を十分に發揮して遊べる、つまり、自分の力を出しきって競争して遊ぶ、というのは大体が自由遊びの場面である。或る発案に何人かの子どもが賛成して出来上がったグループで競争をするときは、それに参加するという人自体が、「しよう」という意欲のある人なので、そこにはもり上った気分が最も出される。そして子どもたちだけでも夢中になって長い時間つづけて行われる。

そこにちょっと先生でも入ろうものなら、よけいに競争心をわきたたせてくる。この場合は他の遊びをしていた人たちも大抵応援の方にまわり、一応それに参加したような形になる。けれどこうして自由遊びの中でしていると、競争あそびに参加する人、というのが大体きまってしまう。それは大体が男の中で活ばつな積極的な子である。

こういう人たちにて、段々とむずかしいきまりのものを指導していつてもついできてどんどんする。そして簡単ではあるが、一応の技術のようなもののみこんで、いやが上にも興味をもつようになってくる。たまに積極的な女の子さんが参加することもあるが、

割合に長つづきしない場合が多い。なんとかして参加させようと試みたが、たいていは全然とっていいくらい関心を示さない。

参加しない理由について考えてみると、競争する、という意識は三歳位のときからあるけれども、四・五歳になると、単なる競争というものに、ちがう要素が加わって、全体の中の自分の位置、という比較的な見方をするようになるためか、気の弱い子、自信のない子、逆に勝気な子、は参加しなくなってくる。

勿論、グループで競争する、ということも幼稚園の時期にみんなに理解させる、というのは無理な段階で、本当にその意味が分ってくるのは小学校の二、三年位なので、幼稚園では目標をそこまでもっていかなくてもよいと思う。ただこの時期は一人一人の子どもの環境によって個人差が大変にある状態である。けれど、そういうものの面白さを幾分でも味あわせたり、目ざめさせたりしたいと思う。幸い、先生が何かしていると幼児はついてくるものである。今までの経験から、たとえば、「活ばつに遊ばせるようにしよう」という意図をもって接すると、それを言葉でい

わなくても、先生の様子やすること、そのこと自体が幼児には一つの大きな刺激となり、たしかにそういうことに好んで参加する子どもが多くなる。だから、子どもに理解出来てそして簡単に面白いものから経験させてひっぱっていくのがよい方法である。

又もう一つ、百聞は一見にしかず、で、そういうものを見る、ということは私たちが考えている以上にいい刺激である。

三歳の子どもが親につれられてサッカーをみてきてから、「先生チャッカーちょう」といい出したり、

テレビが普及してきて、見る機会が多くなつたせいか、おすもうの時間にはおすもうが多く行われ、しかも行司、呼出し、アナウンサー、お辨当はこび、太鼓うちまであらわれるといった工合。

運動会でリレーをみてきてから、リレーこっこがはやって朝くるとすぐからはじまったり。

これなどはこのよい例である。

自由遊びのときに全然参加しないで関心を示さない人については、或る人が負けたというところが自分や他の人にはっきり分らないよ

うなものを、リズムのときからめて行うこともよいと思う。幼稚園ではリズムに参加しないという人は極くまれであるので、そのときからめてするとたやすく参加し、すれば面白さを幾分でも感じてだんだんに自分から加わってくる人も出来てくる。

子どもと一緒に競争あそびをして、いろいろの場面によつたその雑感を少しあげてみる。

子どもは場合によって判断して適当な行動をしたり処置をするということ、つまりゆうづうが出来ないことは幼児の精神発達の上から当然のことである。

どこの園でもそういうことはあると思うが、子どもが活動している間に、何ということなく、本当に知らない間に、目にみえないきまりというものが出る。それには子どもの中から生れたよいものもあるが、反対に悪いものかいうのではないが、あらあらと思うものがある。その一つ、

或るとき遊戯室に競争の遊具をもちこんでコースをきめて遊んでいるのをみた人が、「あんなところであんなことをして」と不思議そう、「遊戯室でも競争してる」とうら

やましそう。ここではこうする、この遊具、道具はこうして使う、というきまりを守るというのも大切な面であるが、巾のひろい、いろいろの経験をさせるということも先生として考えなくてはならない一面であることを痛感した。

みんなと一緒にいすとりのような競争あそびをしてだめになつた人がしていた会話、

「早くだめになってよかつたわね」相手無言
「だつただめにならなければまだしなればならないもの」といった人の顔をちよつとみたら残念そうな顔つき、そして残っているお友達に声援をおくっている。それをみて、口では何とかいっているけれども、この人には全然脈がないわけではなかった、と一安心。

ボールとりを二組に分けてするとき、丁度都合がよいので、時によりエプロンの有無によつて分けた。親からこのごろエプロンをしていかないといいますが、と申し出があり、きがついたら先生はいつもエプロンのない組。それから赤と白の運動帽をそなえたら、参加する人はふえ、一層活ばつに行れた。言葉

でいうより、環境による影響の大きいのに今更ながら一驚。

こういう競争遊びはいろいろとあるけれども、本にかかれてあるものの大部分は、幼児の程度をこえたものが多い。又その園の種々の環境によっても遊びの選び方はあると思うので、その幼児を一番よく知っている先生が子どもの遊びの中から、又は本にある材料を扱うにしても、その子どもにあつたように適当になおしたりして、みんなが気軽に出来るものにして楽しくやらせたいものである。そのとき、先生がどのように適切な助言をし、処置をするか、という扱ひ方が先生の側の問題として残るわけである。

(お茶の水女子大学付属
幼稚園)

× × ×

倉橋先生と新庄先生の共著になる日本幼稚園史が再版になるということを知ったとき、ああよかつたと思つたのは、私ひとりではないと思う。いままで園長室に持出禁止となつて一冊しかなかった本を、読むのに本当に苦労したのである。今度から自分の書棚にもおいておけると思うとそれだけでも嬉しくなる。幼稚園草創のころのすぐれた人々、豊田英雄女史、氏原銀女子などの名前を始めて知つたのもこの書物を通してであつた。その後、著者の口からこれらの人々のことを直接に聞くことができ、創設当時の我が国の幼稚園の歴史に秘められた苦心に一層の親しみを感ずるようになったのも、この書物のおかげである。

この幼稚園史は、客観的な資料を各方面から、集めることに苦労が払われている。あるいは公文書から、あるいは蒐集された書物から、また在世者の口から直接に、追憶を集めるなど、その構成は科学的であり、而もその編纂の順序なると洞察に富んでいる。このようなしつかりした日本幼稚園史は、今後も決して出ないであろうし、またつくることも不可能である。恐らく世界の何処の国でも、このように立流な幼稚園史の編纂されて

倉橋惣三
新庄よしこ 共著

『日本幼稚園史』

のこと

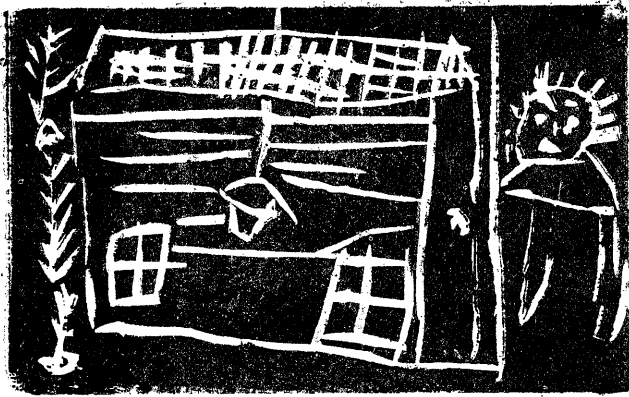
津守 真

学校系統には見られない、教育のスピリットを吹きこんで、それによつて幼稚園が生成されてゆく。この書物は淡々として事実をのべてゆくのであるが、その中に私どもは幼稚園の心とも云うようなものを教えられるのである。二十年の時を距てて後の再版であるけれども、前のと全く同じ活字、同じ装幀で、立派に出来上つた新しい書物を、著者のひとりから頂戴して、その裏表紙にそつと書きつけられた数首の歌の一つを、こつそりとここにとりだすことの無礼を許して頂けるだろうか。幼稚園の歴史に一層の親しみを加えてくれるものだから。

寛きのひとときを欲りてある時し
香なとたきて書きてありしか

弱き性は人にはあはぬをよしとして
一夏を籠り史書きつきぬ

(昭和九年、著者日本幼稚園史を編むに當つて)



マコトちゃん まことちゃん と

◇豪放な泣きぶり爆発

みんな遊戯室へは行って、サークルがはじまったのに、マコトちゃんがひとり、玄関の下駄箱のところで、思

いきり大きな声を出して泣いている。その泣声の間から「かえる！かえる！」というどなりつけるような激烈なことばがほとばしり出る。

この「豪放な泣きぶり」は、マコトちゃんの持前だ。それが爆発したら、先生たちは手のつけようがない。それが、今、おこったのである。

それで、園長先生がやってきた。

先生は、いきなりマコトちゃんをひっかかえた。泣きながら、どなりながら、まさにはきものを取りだして、表へとびだそうとする急な場合だったからである。ことばでとめたたり、肩をおさえたり、手をひっぱったりするくらいではとめられない非常事態だったからである。

そうして、うんと抱きしめて、強い調子でいった。

「かえるんじゃない、かえっちゃ、だめ」非常事態をとめるのには、普通のやさしさでは間にあわない。多少の非常手段を必要とすると思っただからである。

ところが、マコトちゃんの声と呼びは一層爆発した。からだをもがいて、両足は空を蹴った。

これではならぬ。非常手段は益々非常事態を昂じさせるだけだ。それほど、マコトちゃんは興奮しているのである。

それで手を離れた。

土間の簧の子の上へ立ったマコトちゃんは、ブルドックのように「うわんうわん」と吼えながら、両足の脛をこすりあわせて、からだをふるわせる。

先生はちよつとの間、そのままにして、むきあつて立った。おたがいによこし息を入れるためである。この際「息を入れる」のは、疲労をいやすためではない。興奮をやわらげて、気分転換の素地をつくるためである。

やがて、先生は手を出して、マコトちゃん

んの頭をなぜながら、しずかにいった。

「いい子だ、いい子だ、泣きやめるね」

そうして、さっきの「ひっかかえる」のとはちがって、やんわりとだいた。だくとそここの段へ腰をおろした。長くだいてるのは重くもあるし、立っているよりは腰をおろしたほうが、おちついた感じになるからである。

「いい子だ、いい子だ、マコトちゃん、園長先生のいうこと、よくきくね」

もちろん、へんじはいらない。これは話しかけというよりも、むしろ暗示だからだ。それ以上一言もいわない。だまって、胸や、肩や、脊中を、やわらかになぜはじめた。これは、興奮を消して、おちつきを戻し、更には安定感を生みださせるためである。

次第に、マコトちゃんのからだのうごきはしずまり、泣声はすすり泣きに変っていた。そうして、じっと胸に頭を寄せているマコトちゃんを見ると、先生は両方の鼓動がいっしょに会うように思われた。何とはなしに「かわいい」という感じが、よりかかられている先生の胸の中に湧いてきた。

◇寸は寸を尺は尺を取る

「水をたくさん飲んできて、水鉄砲であそびましょう一、二、三、四しゅうしゅうしゅう」

うたう声が、遊戯室がらきこえてくる。

マコトちゃんのすすり泣きは、もうさっきやまった。目はあらぬほうを見つめて、からだはじっとしている。それは、歌の聲が耳にはいつてきたことを示すものだ。

そこで、先生はひとことばだけいった。「遊戯室で、何をやっているのかな」

これももちろん答を予期しての質問ではない。マコトちゃんの注意を、遊戯室のほうへ転じる誘導の一手段にほかならない。

マコトちゃんだまっていたが、相変らずじっとしているのは、その方にひきつけられはじめた証拠だ。そろそろその方へ近ずいても、もう反撥しないだろう。

そこで、遊戯室へ通ずる廊下へ、そうつと出ようとしてふりむくと、入口の戸があられている。廊下へ出れば、それがまっすぐに見える。表まではっきり見える。表を見たら、せっかく外から内へ転じた注意と興

味が俄然もとへかえって、「かえる、かえる」と、もがきださないと限らぬ。否、

まだ全然内に興味が集まったというのでなく、外への関心と絶縁していないとすれば、この危険は多分にある。それには、入口の戸をしめねばならぬ。といって、だいたのをそこへおいて、先生が立っていったのは、今までの安定感がくずれてしまう。といって、だいたのまま立っていつてしまおう。と、表を見せにゆくような、逆な結果になつてしまふだろう。といって、ほかの先生を呼んでしめてもらったのでは、マコトちゃんの注意をその方へ誘うことになつて、表への関心をふたたびよびだすことになるだろう。

先生はしばらく機会を待った。と——ひょっと、ひとりの先生がこつちをむいた。透かさず、そつと片手を挙げて手招きして、戸口をさして、手をふって「しめる」相図をした。心得た先生はしずかにいつてしずかにしめた。すべては無言のうち——マコトちゃんが気がつかないうちになされた。

そこで、園長先生はすくなくともマコト

ちゃんに新しい刺戟にならない程度に、だいたまま中腰になって、そりそりと廊下へにじり出た。そうして、何げなく遊戯室の方へむいて、壁によりかかってすわった。

中では、歌や、遊戯や、お話などが、順に行われていった。それに連れて、マコトちゃんの興味も、その方に向いてゆくことが、それと認められた。

「寸は寸を占め、尺は尺を取る」ということばがあるが、まさにその通り、マコトちゃんの様子と見合わせつつ、一寸出られれば必ず一寸を、一尺出られれば必ず一尺を——というように、次第々々に前へ出た。そうしてとうとう、遊戯室の隅へはいってしまった。

相図をみると、さっきの先生は、そうつと遊戯室の戸をしめた。それでとにかくマコトちゃんは「遊戯室の世界の中の人」になったのである。

◆よい機会があふない

ところで「マコトちゃんが園長先生にだかれてる」ということは、ほかの園児たち

に取って、驚異でもあり、好奇的でもある。かわるがわるふりむいて、その方を見る。

もう興奮がさめて、一応平静になったマコトちゃんは、見られると、てれっくさくになって、先生の膝の上で小さくなった。それがひどくなると、まださっきの大泣きの後味がまったく消え去っていないので、ひよっと誘われて、しくしくはじめないとも限らない。そうならたら逆転である。

先生は、ふりむく子どもにむかって、無言で手をふり、目をくばって制止した。「こちちを見てはいけない」などと、ことばを出すと、かえってほかの子どもを刺戟して、いよいよこちちをむかせることにもなり、またマコトちゃんの耳にひびいて「見られている」という意識を強めて、いよいよちみちあがらせることにもなるからである。

やがて、マコトちゃんの組の子どもたちが、ピアノに連れて、床の上に大きく円く描かれた赤線の上を、ぐるぐるまわってあるきだした。

見ると、マコトちゃんはじっとその方に

目をそそいでいる。

よい機会！先生はだいたまま立ちあがると、列の中へはいろうとした。そうしてマコトちゃんを離して、お友だちといっしょにあるくようにして、もとにかえらせようというつもりだった。

ところが、マコトちゃんはふんぞりかえって、両手で先生にかじりつくと共に、両足をばたばたさせた。

時期尚早！先生はすぐひっかえして、また、今までの隅へすわって、今までのようにじっとだいた。

◆額と額をこつんさせる

おひるの時間になった。

みんなじぶんのお弁当をもって、めいめいの部屋へはいる。

マコトちゃんは先生の胸から頭をはなして、顔をあげて、その方を見た。興味がひかれるという以上に、たぶん「おなかの要求」を、新しく感じだしたのだろう。

ここがまた機会！そう思った先生は、いっしょにお弁当を取って、いっしょに部屋へはいっていいこうとしたが、そうすれば、

益々お友だちの注視を浴びることになって一層でれっくさが加わり、先生と離れにくくなるおそれがある。

「もっと自然に仲間へはいる方法はないだろうか」

考えると、ふと、或る思いが浮かんだので、いった。

「マコトちゃん、組の中で、誰が好き？」

「まことちゃん」

「ああ、まことちゃんか」

成程、同じ組に、もうひとり「まことちゃん」がいた。

「マコトちゃんだから、まことちゃんが好きなんだね」

そういうと、にっこりした。

「ちょっと、まことちゃんを呼んでちょうだい」

大きな声で、先生を呼んでいった。

もう声を出していてもだいじょうぶな程度に、マコトちゃんの気持が回復したことがわかったからである。

まことちゃんは、何事かと、ふしぎそうな顔をしてやってきた。

「まことちゃんね、マコトちゃんがまこと

ちゃん好きなんだって。だから、マコトちゃんのお弁当、もってきてやってね」

そうすると、まことちゃんはにっこりした。むしろ誇らしげにお弁当をもってきた。

「どうもありがとう」

先生は、マコトちゃんのかわりにお礼をいって、お弁当を受取って、渡して、はじめて手を離して立たせると、そのまま立った。

それで、ふたりはむきあった。

「マコトちゃんとまことちゃんとおなじだねえ」

そういって、ふたりの頭へ手をやって、

額と額を軽くこつんとさせると、両方とも笑いだした。

「だから、マコトちゃんとまことちゃんはすきで、仲よしだね」

ふたりともこっくりする。

「だから、いっしょに、お弁当たべるね」
「ふたりともこっくりする。」

「じゃあ、まことちゃんとマコトちゃんとお手々つないで」
先生がちよっと手を添えると、ふたりは手を取りあった。

「そうそう、そうしていっしょにお部屋へ

いくね」

ちよっと、マコトちゃんの額に影がさしたようなので、先生はお弁当をもった片手を取って、まことちゃんと両方から、マコトちゃんをまん中にしてあるきだした。

部屋には、みんなお弁当を前にして腰かけていた。

先生はすばやくふたりをならんでかけさせて、すぐ、みんなで「食前の歌」をうた

わせる。いうまでもなく、ほかにそれる寸隙も与えないで、お弁当の雰囲気の中に、マコトちゃんを引入れてしまうためである。

はじめはちよっと手足をぎくぎくさせたようだったが、うたっているうちにやまった。

うたいおわると、受持の先生が「めしあ

がれ」みんなが「いただきます」

かくて、マコトちゃんはまったくもとのマコトちゃんにかえたのである。

× × ×

× × ×

『童話化』について (三)

本田 和子

三、どのように変化して「童話」となるか。

(その一)

成人の世界に産まれた物語が、子供の世界に入り込んで子供の物語となった時、それはもとのままの形と内容をもった成人の物語ではない。多少はあるにしても、その全てがどこかに変化を受けて「童話化」されている。

この変化はどのようにして生じ、どの方向へなされているか。それを考えてみよう。

「童話化」の二大主流として、「自然的変容」によるものと、「意図的変容」によるものが考えられる。「自然的変容」とは、伝承の過程でいつの間にか変化していき、子供の物語としての体裁を整えていくこと。「意図的変容」とは、変えようとの意図の下に起る変化である。この二つを区別して考えてゆくことにする。

1 「自然的変容」による「童話化」

「自然的変容」による「童話化」は、承け手の受け入れ方によって生じる。即ち聴衆が成人から子供へと移行することによって、伝承される物語が、承け手である子供の心性を反映してくるのである。

一つの物語が記憶される場合には、その記憶者が物語を把握する場合の「意味的枠組」によって、記憶される物語の内容が変わってくる。そして、その「意味的枠組」が成立する過程には、その記憶者の社会的文化的背景が反映し、その人の身につけている態度・習性などが色濃く作用する。それ故に、成人の表現をもった物語も子供に伝えられる場合には、子供らしい表現と内容と、生活描写をもった物語となるのである。

物語が文字として固定されてしまわない口授伝承の場においては、特にこの受容者の心性が作品をリードする。

そして、子供達は、自分達に理解し得ない事柄には基着しない。



理解し得る箇所だけを受け入れ、子供の理解の域をはみ出すものは頓着なしに省いてしまふ。Paul Hazardの言を借りれば、「微笑を以てはじめられたことが憤怒に変わり、嫌悪の中に終ることがあろうとも、子供達はただその微笑だけを覚え込み、それだけを取り入れてしまふのである。」

子供達にとってわかり易く好ましい物語ほど、よく承けつがれ伝えられていったのは当然であつたらう。

例を挙げよう。馬琴の「燕石雜誌」の「桃太郎」の考証によれば、当時「桃太郎」には二型が存在した。即ち、その一つは現在のように「桃から男子の産まれる型」であり、今一つは次のようなものである。

——婆、桃の実を二つ得て家に携えかえりて、夫婦これを食うに、たちまち若やぎて、かくて一夜孕ることありて男子を産めり、因て桃太郎と名づく。——

当時の絵草紙にも後者の型がみられ、婆の産室が描かれている。然し、いつか全く後者の話型は姿を消してしまつた。

——桃がバチンと割れて、中から可愛い男の子が生まれました——。

この件りは「桃太郎」の中でも、特に子供達に愛好される箇所である。このようにして「異常誕生型」だけが子供に承けつがれ、「婆若返り型」は伝承の途次に消えていったのも、子供に与えた印象の強さと、意味のちがいによるものであろう。

口授伝承の場において、児童達は成人によって、幾分理解し易く子供向きに改められた物語を耳にする。それと同時に、成人達の娯楽のために、職業話術家の語る「夜伽の席の物語」を、成人

にまじつて聞く機会をも持たずに相違ない。そして時としては、同一題材を二通りの型で聞く場合も生じたであろう。そして、子供達の間保存され、子供達のものとした話型と、文化の進展と共に成人の世界から捨てられ、そのまま子供の世界にも住みつき得ぬままに消えていった話型も少くないことと思われる。現在命脈を保っている「昔噺」、即ち「民間説話」の大部分に童話的色彩が濃厚であるのはこの事情によると思われる。

子供達は、好ましくないものを消滅させるだけでなく、それを好ましいよう、理解し得るよう改めることもする。然し、このように、伝承者が子供なるが故に、改められ省かれる部分が好在すると同時に、伝承者が子供なるが故に、成人の場合の伝承の経過を踏襲せず、成人の世界でなら当然改められ省かれる箇所が保存される場合もあるのである。

物語が記憶される場合、主筋に関係の薄い部分や、余計な形容句などは除かれる運命にある。然し、「童話化」の場合においては、これが幾分異つた様相を示している。

次に掲げるのは、この「童話化」の特殊性の例である。今日、「猿蟹合戦」の童話に挿入されて広く流布している蟹の呪文「早く芽を出せ柿の種、早く芽を出せ柿の種、出さぬと缺でちよん切るぞ。」は、今日では極く一部の地方に残っている果樹を脅かして豊年を期待する信仰から出た一種の呪術である。これは、社会の開化と同時に忘れ去られていったものである。この旧い民衆の生活が快いリズムミカルな口調と、木によびかけるアニミズムとによって、児童の世界に取り入れられ、歴史の波をくぐって今日まで保存されてきた。筋の展開だけなら、単に「蟹は早く芽が出な

いかと待っていました」程度ですむことであり、この呪文はむしろ不要部分である。然し、伝承者である児童達は、これを省くことをしなかつた。

こうして、児童に独特の省略法と改め方の下に、更に児童に独特の部分が保存されながら、全体としてその物語が簡約化され、単純化されていく時、その物語は童話となる。そして、このように特殊な過程をたどる故に、結果として原型より不合理になる場合が生じる。物語の記憶は「合理化」されるのが通常であるが、「童話化」の場合にはこれが「不合理化」されるのである。

これも例を挙げよう。「カチカチ山」の物語に登場する狸ほど一貫しない性格の持ち主はないと云われる。即ち、婆をだまして殺してしまうほどの性悪な狸が、後段に至っては兎に他愛もなくだまされ続け果ては殺されてしまう。ひどい火傷をさせられながら、また同じ兎に簡単に誘い出されて泥船に乗せられる所など、とうてい以前の狸と同一に思えない。また、火傷の件りでも狸に柴を背負させた後で兎が火をつける場面でも狸は底抜けの間抜け振りを示している。即ち次のようである。

——「カチカチ云うのは何だい。」「ここはカチカチ山さ。」

「ボウボウ云うのは何だい。」「ここはボウボウ山さ。——」
これでは問いに対する答えにならない。カチカチ山なる名称をもつからと云って、カチカチ鳴る音の原因は不明であり、ボウボウ山も同様であるのに、狸はいかにもお人好し然と納得している。前後の關係からみてこれはいかにも不合理な話である。

現在のような「カチカチ山」の話型が出来上る前から、兎の大手柄を主にした物語は数多くあったが、その一つに次のようなものがある。

——兎が悪智慧を働かして熊にひどいけがをさせる。次に会った時、熊が兎をひどくなじると、兎は平然として、「ここは杉山だ。俺は杉山の兎だ。葎山の兎のしたことまで俺が知るもんか」と云い逃れる。同様の云い逃れをくり返して、熊をだまし続け、とうとう殺してしまう——。

これは、現在の「カチカチ山」よりも合理的で智巧の加わった話であるが、これが旧型と想像されている。

然し、児童においては、同じ兎が同じ狸をくり返します時の悪役狸の愚かしさを、善玉兎の賢さに興味が集注し、まわりくどいだと思いますための技術が簡単に省略されて圧縮された。そして、カチカチ山なる名称の面白さがそれに附随して残った。婆を殺したほどの悪賢い狸が大した技巧もなく兎にだまされ続け遂には殺されてしまう不合理さも童話の世界なるが故に許されるのである。

理解し得ぬ事柄、陰に潜む伏意、諷刺、文章とか言葉の持つニュアンス、児童の生活から余りにへだたった生活内容などは省かれる。作中の人物は身近なものに、題材は卑俗なものになる。生活には、児童自身の姿が反映され、描写、表現は全てその時代の子供のものとなる。リズムカルな文句、呪術的な要素は残される。そして、結果として平易な単純なものとなり、原型より不合理な点すら現れる。これが、自然に児童の力でなされる変容の姿である。

2 「意図的変容」による「童話化」(その一)

受け手の心性を反映しながら、物語がたどる「童話化」の過程は消極的なものでしかない。より積極的な変化は、伝え手の側の善意に源を発している。

物語の伝え手を大きく分けて、「家庭における伝え手」と「社会における伝え手」の二つの面から考えよう。

物語は、口授伝承の長い歴史を通じて、家庭を場として子供達へ語りつがれてきた。古い時代には、神話・伝説に関しては一定の語り手が役職として存在したが、子供達へ物語を伝えたのはこれらの職業話術家ではなく、子供達と接触する機会の最も多い母親か、労働から解放されて時間的に余裕をもった老人達であった。家庭を場にとる時、物語の伝え手が母親であること、そして祖母がこれに次ぐことは今も変らぬ事実であろう。以前に試みた調査でも、約四〇〇名程の男女学生の記憶に残る物語の伝え手は、五五・五%までが母親であり、祖母が続いて一一・四%を占めていた。

それでは、このように母親が物語の主要な伝え手であったということは、物語の「童話化」にどんな影響を与えたであろうか。

職業話術家は話すことをもって生活の糧としている。それ故に聴衆の興味をそそるべく、話し手としての人気を保持すべく様々な工夫をこらし新しい話材も産み出さねばならない。然し、家庭の母親には、この必要はない。子供達に求められた時、それに応じるだけの話材があればそれでよいのである。伝達される話材が、母親自身の幼い時に承けついで昔噺に固定化し、それが代々語りつがれていったのは当然であろう。

伝え手として、母親は先ず話材を固定化した。それでは、これ

等の幾つかの物語を、母親達はどのような意図の下に扱ったであろうか。

もち論、母親達は、子供の求めに応じ、子供の欲求を満たすために物語を与えたであろう。然し、幼い者を教導する立場にあった母親は、この機会をも決して逃しはしなかった。子供達をよりよく育てるために、物語は一つの教材としての役目を持たされたのである。直接に道徳を説くことより、それを物語の中に具象的に描き出すことによって、聴き手に強い感動を与え、聴き手の行動を方向づけ易いことを、母親達は体験として知っていたのである。

例を引こう。先ずボビュラーな昔噺「こぶとりじいさん」をみよう。これは、内容・表現その他の点で古い記録と現行のものに殆んど差が見られない。然し、「宇治拾遺物語」に採録された説話をみると、勤善懲悪の要素が非常に少い。教訓と云えば次の一文だけである。

——物羨みはすまじきこと——

よい爺と悪い爺、或いは正直爺と不正直爺の対立等は全然みられない。これが善因善果的な現在の物語になったのは伝え手の意図によるものであろう。

次いで、古説話に散在する卑俗なくすぐりや、露骨な表現を女性の細かい神経は児童に伝えることをいとうた。

例を掲げる。これは東北地方に流布していた猿地藏の話」である。

——雨宿りをしている中に眠ってしまった爺を猿が見つけてお地藏様だと思い、かついでいって多くの供物をする。爺は夜が

明けてからその供物を持ってかえる。隣の爺が真似をするが、猿がかついで河を渡る時にはやす滑稽なはやし言葉に、遂笑い出してしまふ。偽者と気づいた猿達は、爺を河の中に投げ込む。

この物語は、猿のはやし文句が中心になっていて、それを笑わずに我慢した爺と耐えきれずに笑い出した爺とを対照させている。このはやし文句は所により様々であるが、「猿ふぐり濡らすとも、地藏のふぐり濡らすな」といった調子の下品なくすぐりで笑いを狙ったものであった。それ故に、現在も「猿ふぐりの話」という名前で行われている地方もある位である。然し、女性の注意深い神経は、この卑猥な笑いを好まず、はやし文句は「猿は濡れども地藏さん濡らすな」式に変えられていった。これでは、物語のおかしみは消失し、隣の爺が笑い出して失敗したのがむしろ不思議である。「童話化」され、注意深い改変がなされて、この物語も不合理になっていった。

母親達は亦、美しい話を愛し、女性特有の感覚で、残酷な事件・陰惨な出来事を嫌悪した。

例を挙げよう。「カチカチ山の童話は誰の目にも著しいつなぎ目をもっている。即ち、爺の手に容易に捕えられる狸が、急に悪賢い偽善者となって婆をだまし、更に子供のようには兎の云うなりになって殺されてしまふというように一貫しない性格を示すが、これは異った物語が繋ぎ合わされている。ことにもよっている。「牛方山姥」とか「天道様、金糸綱」とかの昔噺もこの型であるが、こういった結合について柳田国男氏は次のように述べている。即ち、これらは全然独立した物語として、以来から存在した。「カ

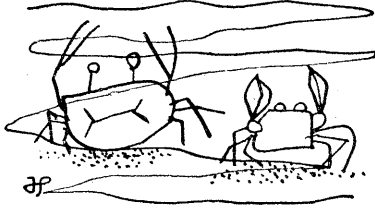
チカチ山」の第二段は所謂動物説話で、狸の持ち前の悪智愚で厄難を脱するのが話の山である。然し、この物語の結末、婆を殺してそれを料理し、それを爺に食べさせる件りは、グリム説話にも、わが国の「瓜子姫子」等にもみられる型であるが、子供達に与えたくない陰惨な部分である。そこで幼い聴衆の意向を慰め、おぞましい後味に震えさせぬために、女性の感覚が渡り廊下式のものを開明した。即ち、兎が現れて爺の悲嘆を慰め仇討ちを誓うという繋ぎ目である。後段の兎の大成功を述べた物語は、この結合以前から数多く存在し、兎のいじめる対象が熊であったり鹿であったりして、狸汁とは関係のない物語であったことは前にも触れた通りである。

同様の例がギリシヤ古伝説の「童話化」にもみられる。即ち、伝説では死を免れ得なかつたサムソンを「デダロス」の翼によって逃れさせているのである。

伝承の過程で、古い物語はこうして母親の主管の下に教訓を附され、下品な箇所・残酷な部分が省かれながら「童話」と化していった。そして、この力は華々しく表面にこそ現れないが、現在においても絶えず働き続けて、成人の世界の物語を童話の方向へと押し進めているのである。物語を求められ、既成の童話が話しつくされた時、母親達のかつて読み、或いは聴いた物語が「童話化」されて、子供達の世界に入り込んでいくのである。

(未完)

園児の運動能力はどのように発達するか



岡本卓夫 (徳島大学芸学部体育研究室)

岩佐宗子・北島美代子・永根久枝 (同附属幼稚園)

四宮喜久・岩脇玉枝・森 淑子・大塩幸子・乾 恵子 (徳島県板野郡成土)

豊田種子・柴折善美 (徳島県板野郡北灘幼稚園)

新入園児を迎え、今年こそは立派な保育計画をたてて満足する様な教育をしてみようと先生方にはそれぞれ貴重な時間と労力が費やされている事でしょう。しかしよく反省してみると、教師の計画や指導が、ともすれば彼等のこの時代の急速な発育や発達のために喰い違ってしまったり、取残されて行ったと云う様な場合が起りはしなかつたでしょうか。発達に即した教育の重要性は今更述べるまでもないが、特にこの時代の子供の教育に於ては発達に関する一層綿密な調査や研究が必要なのではないだろうか。一年に一回程度の調査を基準にしては充分彼等を伸ばす事が出来ないだろう。可能な範囲で、出来る限り多くのデータを集め、それに基いて彼等の実態をより具体的に把握し、より合理的な計画や指導がなされねばならないと思うのである。その一

分野として私達は幼児体育への一参考資料とするため、現在までに余り明らかになされていない、幼児の基本的運動能力の実態調査をし、入園から修園までの一カ年の間に子供達のそれ等諸能力がどの様に発達変化してゆくかの実態を調査したが、大体把握出来たと思うので、体育的な面のみならず他の面に於ても何等かの参考になれば幸いと思ひ発表することにしました。

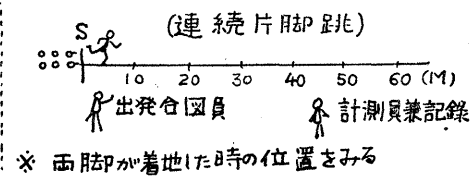
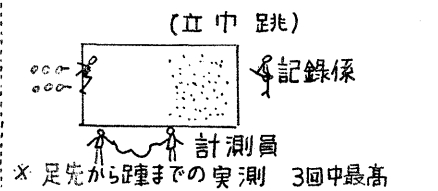
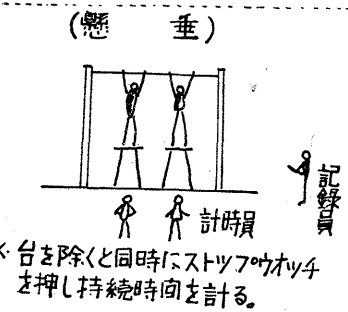
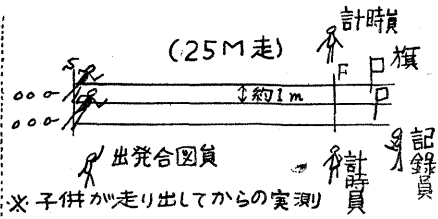
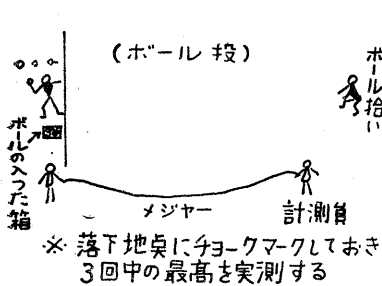
一、調査対象

A 年令 自昭和二十三年四月―至二十

四年三月生れ (平均満五歳児)

B 調査人員及調査園

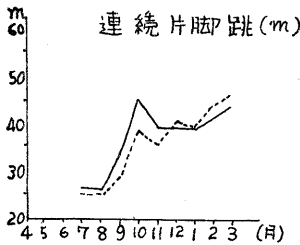
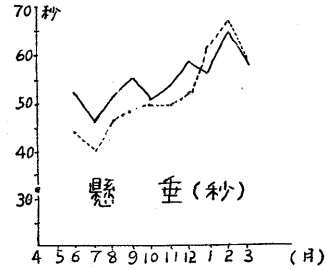
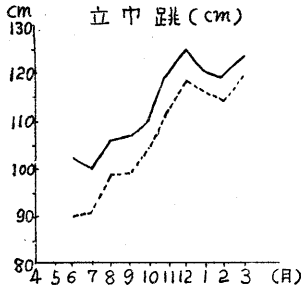
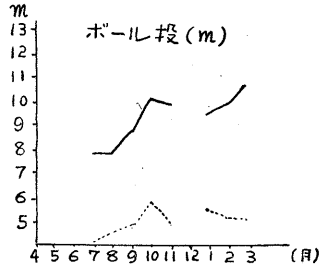
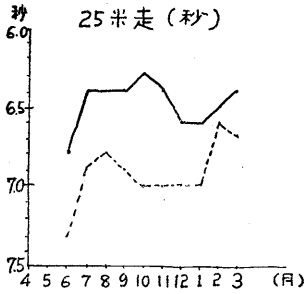
地域別	園名		性別
	男	女	
都市	徳島大学芸学部附属幼稚園	40	36
農村	徳島県板野郡土成幼稚園	30	27
漁村	徳島県板野郡北灘幼稚園	38	64
		108	197
			計



- 二、調査種目
 - 1 二五米走
 - 2 立巾跳
 - 3 連続片脚跳
 - 4 ボール投 (150g トップボール)
 - 5 懸垂
- 三、実施方法 (上図)
- 四、調査期間
 - 自昭和二十九年
 - 五月一 至 三十
 - 年三月
 - 毎月下旬、平均
 - 三日間
- 五、結果の整理 (次表)
- 六、結果の考察

④性別に見た能力
 二五米走、立巾跳、ボール投に於ては一力年を通してはつきりした男女差があらわれて居り、男子の方が優秀である。特にボール投に於ては、相当なひらきがあるが、これ等は概して彼等の日常生活である遊びの仕方やその経験程度によるものと思われる。又連続片脚跳、懸垂に就いては冬季に於て女子の方が優位になっている。寒いと云う事の意識は一般的にも意志が打負かされる場合が多い。殊にこれ等、連続片脚跳とか懸垂は持久力を要する種目であり従つて意志に影響される。運動の発達は一面心理的には意識の集中度とか意志の発達と密接な関係をもつていられると言われているが、この事から考察すると、女子の方が与えられた事柄を真面目にやろうとする意識の集中度が高まって、それが意志となりこの様な変化があらわれたのではないかと思う。

一般的傾向として既にこの年令に於て、運動能力の面にも、男女差が大体はつきりあらわれている。が然しそれ等の発達の型は



〔註〕

1. ———男子女子を示す。
2. グラフは全体平均のものを示す。但し一地域の時のみはグラフに表わしてない。

男女非常によく似ている。

③季節的に見た能力

季節的には入園当初の春(五、六月)頃は未だ園生活に馴れないので、活動も不活潑であり、又テストそれ事態も彼等には初めて経験するものであつたりして、運動能力も目立って著しいものはないが、段々と馴れ気候もよくなり、服装も軽快になるに従つて運動能力も次第に向上し、夏休中の活潑な遊びの生活と、充分な休養とにより、秋(九、一〇月)頃より急速にその能力が上昇しているのがみられる。然し又一月頃の寒い季節になると、服装も自然重ね着が多くなり、運動が不活潑になるし、寒土のために意志の統制方も幾分弱められ、両者相俟つて、自然的にフラストレーションの状態にさせられ、そのため運動能力も一時的に阻止された状態になる。そして又修閑頃のぼかぼかと暖かな季節になると服装も減り、遊びも活潑になってくるので運

動能力も上昇する。但し、懸垂のみは、男女共果進的な発達形式を示しているが、これは他の種目と異って動かなくてよいので服装に支配される事が少いからである。一般的に彼等の運動能力は季節(それ故に服装とか意識、意志)に支配され乍ら発達して居り、一定の波、即ちリズムを以って発達している様に思われる。

◎地域によって、能力にどんな差異があるか。

1 二五米走

男 都―農―漁 の順で男女共都市が優位
女 都―漁―農

2 立巾跳

男 都―漁―農 の順で農村が下位
女 漁―都―農

3 連続片脚跳

男 農―漁 で農村が良い
女 農―漁

4 ボール投げ

男 漁―都 で漁村が良い。
女 漁―都

5 懸垂

男 農―都―漁 の順で農村が優位
女 農―漁―都

以上の事から瞬発的な力を要する、走、跳の如きは都市が良く、懸垂とか連続片脚跳の如く、持久力を要するものは農村が良く、投等肩の力を要するものは漁村が良い。この結果は廿九年度本県教育庁保健体育課で調査した県下学徒の運動能力集計の地域別差異の結果と、ほぼ同じ結果を示して居り、環境的な特色があらわれていると思う。

七、結論

以上の考察を纏めてみると、

Ⓐ 園児の運動能力は多少の性的差異はあるけれどもその発達過程は非常に類似している。特に投に於ては男女差が大きいから取扱いに充分研究を要する。

Ⓑ 園児の運動能力は季節に依りそれ故に服装によって支配されるから、活潑な時期には動的单元を、不活潑な時期には静的

单元を取り入れること。

◎ 園児の運動能力は意識の集中度に相当関係すること。

① 園児の運動能力は一定のリズムを以って発達してゆくこと。

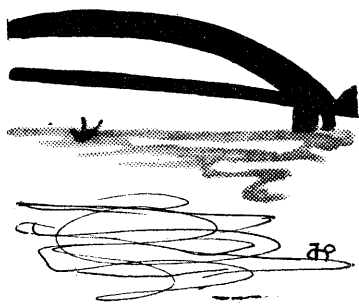
② 園児の運動能力は偏差が大なること。

大体以上の様な事が考えられると思うが指導や計画に当ってはこのような点を考慮に入れておかねばならないであろう。

尚本研究の方法其の他に科学性を欠いた点もあるが、園児一般の傾向がやや理解出来ると思うので報告する。

× ×

かけ出し教師と子供たち



去る四月、はじめて保育者として、また社会人としての第一歩を踏み出した私です。
毎日たまたまなく苦しく悲しいことばかりでした
が……

A 生

社会人として保育者としての生活に第一歩を踏み出してから丸二カ月、何もかも驚く事ばかりの毎日に、ただもうめまぐるしい程に過ぎ去ってしまいました。

私の奉職した幼稚園、それは今迄見学したり想像したりしてきた幼稚園とはあまりにもかけ離れた所なのです。何も大学の附属の様な特殊な環境と同じものを、私が一般の地域に求めていたのでは決して有りません。が、それにしても都会の中心にしかも公立でこれ程ひどい幼稚園があらうとは思いませんでした。

保育室二室以外には職員室も遊戯室もなく、床には所々破れ穴が開いていて、子供がお辨当の時うっかり床に落した箸が転

げこんでしまったり、又保育時間が終れば鼠がその穴から出入り入ったりして遊んでいるのです。天井からは、二階でがたごとする度にばらばらと砂が落ち、ひどい時には机の上一面ざらざらになってしまいます。雨が降れば、ばしゃばしゃと廊下に雨もりでバケツを三つも四つも配置しなければなりません。庭は庭で、たちまちのうちに池となってしまい、雨があがればすぐに、帚で掃き流すのです。雨さえ降っていなければ一日中でも外で遊ぶ子供達なのです。それに対し、屋外遊具はブランコ二つとすべり台が一つあるだけです。幼稚園設置基準がうるさく云われながら、一体これで八十名の園児に対して当てはまっているかしらと首をかしげてしまいます。

子供達の質はどうかと云いますと、放り出されの生活が大部分で、あとは無暗に甘やかされていて、教育という事については全く与えられていないと云っても過言ではないでしょう。無関心な親達……。でも今年は今迄よりはまた良くなった方だという事なのです。一昨年等PTAですべり台を買おうという問題が出た時に「洋服が汚れるから置かないでもらいたい」とか、又昨年は「父兄会等暇がないからやらなくて欲しい」と云った具合だったそうです。幼稚園はただ子供を時間内あずけておくとか考えないのかも知れません。

男の子の遊びと云えば、どこからか棒切を見付けてきてはそれで喧嘩をする様な事ばかりで、積木等では殆んど遊びません。

最近いくらか使い始めたと思いましたが、喧嘩の棒切の代りに振りまはしたり、自分の背丈程に積みあげてはそれを一撃のもとに壊すといった事を繰り返して喜んでいきます。女の子もままたごと遊びは少く、ただ人形を抱いている事、マリを手を持っている事だけで嬉しそうな顔をしています。

泣く子供も多く、そうした子供を親から離し面倒をみるのは精一杯で、あちこちにぼつんぼつんとぼんやり指を喰わえて立っている子供には気になりながらも仲々手がまわりません。お友達同志親切にしたり仲良く遊んだりする様子はあまり見られず、強い子供が弱い子供をからかったり、つっいたりして、そこそせいじめる事が非常に多いのです。

鼻をたらししている子供に「鼻をかみましょう。」といいますがすぐかむまでは良いのですが、目をはなしていればその紙を保育室の、所かまわずぼんと捨ててしまいますし、廊下へ平気で唾を吐いたりもします。又約束という事が良く解らないのか例えば「ブランコに立って乗るのはやめましょう。」とお部屋でみんなで約束をし、その時は「はい。」と返事をするのですが、さてブランコに行くとき目で注意すれば「そんなの知らないよ。」とか「ああいんだよ。」等と云ってやめようとしません。当然家庭でなされていなければならぬ基礎的な躰をみんな幼稚園でしていかななくてはならないのです。

こうした環境に置かれ、この中で保育者としてやっていかな

ければならないのかと思えますと、恵まれた家庭の子供を整った設備の中で思う様に理想的な保育をしているお友達がうらやましく、何で私一人だけがこんな所へ来てしまったのか、みんなからはどんどん置き去りにされていく様で、考えれば考える程たまらなく悲しくなり、涙のかわく間のない毎日でした。

今迄一生懸命学んできた保育の勉強も無意味な事だと思いいました。自分で好きで選んだ道、それなのにこんな事では……。私は真から子供が好きではなかったのか、保育という仕事を続けていく事は無理なのかと云う疑問さえ起りました。

けれど、「いやだ、いやだ。」の連続も一カ月を過ぎる頃から、少しずつ落ち付き、与えられた環境に於いて、自分の最善を尽さなければいけないのだと思う様になりました。学校時代の実習、それは確かに最高の保育でしたが、こうした環境に於いても保育の根本には変わりなく、方法さえ考えればよいのだという事ははっきりわかりました。何故なら、学校での実習は外に出ては、何にも役に立たないという事をよく耳にしていたからです。

音に合わせて手をたいたり歩いたりする事のまだまだ出来ない子供達、何事もあせらないでゆっくり時間をかけてしなければなりません。充分な環境に育てられている子供が一カ月で出来る事ならば、二カ月も三カ月も必要でしょう。

たった一年間、どれだけの進歩が見られるでしょう。明るい

はじめての保育の経験

子供、夢の持てる温かみのある子供になってくれたなら……。

保育に対する情熱も再び燃えはじめ、私の生活もどうやら軌道に乗ろうとしています。どの様な方法で保育をしていったら一番良いのだろう。どの様なものから入っていったら興味を起させる事が出来るだろう。等としなければならぬ事はいくらかでも有ります。これからが本当の保育の世界なのです。どんな荒波が押し寄せてくるのか。でももう大丈夫です。最初の打撃があまりに大きかっただけにこれからはどんな事にも決して負けは致しません。当面の問題に園舎の取りこわしという事が有ります。新しい園舎の建てられるのは何時の事か見通しは無い様です。すべり台もブランコも使えなくなってしまうでしょう。屋外遊具が一つもなくなったなら子供達はどうするでしょう。本当に子供のためにあらゆる工夫をしなくてはなりません。

それぞれの幼稚園で働いているお友達、どんなに良い環境におかれても、各々何かの問題に悩んでいます。しかし誰もくじけては居りません。「お互に頑張りましょう。」という事で慰さめ合って、慣れないながらも一生懸命仕事に励んでいます。

保育の世界に産声をあげたばかりの私、これから子供達と手を取りあって一歩一歩進んでまいります。そして幼児教育という尊い仕事に微力ながらも自分の最善を尽していくつもりです。



今、私の組の子供たちの中の一人で、常に私の頭を悩ませている子供を例にとつて、私の幼稚園生活第一歩の経験をここに紹介してみます。

T 生

はじめて私の接した幼稚園という社会は世の荒波をよそに何と暖く守られていることでしょう。「社会に出れば学生時代とは違うのだから」とか「いつも緊張して他の人と協調しなければ駄目よ」とか「今迄の様に自分の意志にまかせて自由な行動は出来ないのよ」等と先輩からいろいろ注意されていたのに。幼稚園は精神的には社会の中の温室と言える所だとささ今この私には思えるのです。私達を良く理解し何でも相談にのって下さる園長や主任、先輩の先生方の家庭的な雰囲気の中で安心して頼ったり、多少あまえたり出来るのですから。すべての幼稚園が皆この様であるかどうか解りませんが、現在の私は恵まれた環境にあると思っています。しかし反面、身体的にはちっとも

温室ではありません。はちきれそうな元氣一ぱいの子供達の中にあるときは何も忘れてとびまわっているのですが、帰りの満員電車の中で二本の足が重い体をささえて立っているのをもてあましてしまいます。その為代る代る足を持ち上げ少しでも足に掛かる重力を減らしてやろう等という足愛護精神は、とうていオフィス等に勤めていては理解出来ないものだと思います。

家に帰りやと手足をのぼして人心地にかえってから空白になったような頭の中で余った精神力のすべてを集中させて今日一日の反省と明日のプランをたてるのです。先だつてのように毎日雨が降り続いた時等、どうしたら子供達に興味のある、しかも意味のある一日が過ぎせることができるだろうかと考え、泣きたくなることもありましたが、とも角恵まれた環境に居る為、専ら子供達の事の方に没頭出来る教師としての私を幸福だと考えています。

今、私の組の子供達の中の一人で常に私の頭を悩まして子供達の例をとって、私の幼稚園生活を、ここに紹介してみようと思います。

私は、この幼稚園で最年長組の白組の子供達と特に密接な関係を持つことになりました。この組は全体的に元氣が良過ぎる位で、体も大きく、子供らしさのあふれた明朗な組なのですがその中に目だつていつも一人っきりでいる子供があるのに気がつきました。この組の半分位の子供は、前から幼稚園に来てい

た子供達で残りの半分位は新しく四月から入って来たのですが一般に前から居た子供達は内気で社会性に乏しい様な傾向があるのです。しかしこの子供は残留組の中でも特にそれが強く友だちと話をしたのもあまり聞いた事がないし、たまに微笑をもらす事はあつても大声で子供らしく笑つた事は無く、もちろんふざけたり悪い事をして叱られる事も全く無いです。

お絵かきをするのを見ても画きたいという意欲はぜんぜん見られず、いつも同じ決まりきつた絵ばかり画くのです。この子供の自由画帳を見て驚いたことには、いつもいつも直径一・五センチ位の赤い丸の下に茎があり葉が二枚出ているお花が二つか三つきちんと並んでいて、土があり空がある絵ばかりです。色のぬり方等力つよく隅々まできちんとぬっています。何故この子供には、子供らしい楽しさが無いのだろうと私自身も悲しくなりました。又製作の時等、大勢と一緒に何か仕事をして、自分の思う様に出来ないといつもシクシクと泣き出してしまふのです。

私ははじめてのうちは、泣く事により傍の子供に及ぼす影響を考え、ただ迷惑になるからという意味でその子供をなだめてやったりしました。だいたい、この子供の泣く原因が解らなかつたので、それより他に方法が無かつたのです。が、これは母親が赤ちゃんの泣く原因も解らずにただかわいそうだという気持ちで懸命になつてあやすのに似ていました。

私はこの子についてもっと良く知りたいと考えてこの子供の前任だった先生やお母さんとお話してみました。そしてこの子供が心臓弁膜症だという事を知ったのです。この子供の無気力さ不活潑さは病氣から発して、遂にこの子供の氣持にまで影響を及ぼしている様に考えられました。それからこの子供は、家庭に於ては幼稚園に居る時と違って大声で笑ったり時々ふざけたり弟の世話を良くしたりするのを知って驚きましたがそれと同時にがっかりしました。何故幼稚園に来ると家庭に居る時と違ってしまふのでしょうか。自分がお友達と一緒に飛んだり走ったり思う様に出来ない事がそれ程精神的に苦痛なのかしら。それとも他の人から「お前は病氣だから」等と云われているのではないかしらという考えてみました。

私もなるべくこの子供と一緒に遊びたいと考えるのですがなかなか新しい先生に馴染まないで、前に担任だった先生の側にいつもくっついていっているのです。どんなにやさしく積極的に遊びに入って行こうとしてもついて来てくれず何だか私に対してよそよそしい態度をします。私はこんな所で新参者の悲しさを味あわなければなりません。私には欠けていて前の先生にある何かがあるのではないかと深く反省してみました。

ところが或る日、何でもないちょっとしたきっかけでこの変なわだかまりが解けて来ました。それは自由遊びの間に私が五六人の子供とゼスチュア遊びをしていた時のことです。私がい

ろいろ身振りをしているとその子供も私の側へやって来ました。そして楽しそうに、面白い身振りの所は笑ったりしながら見ているのです。私はこの子供がこんな嬉しそうに笑っているのを初めて見ました。

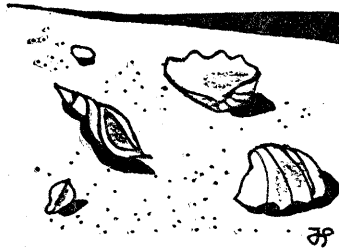
私の頭からはゼスチュア遊びはだんだん抜けて行ってその子供の事だけで一杯になりました。こんな良いきっかけが出来たのだからこの機会に、この子供をもっと楽しそうに生き生きとさせてあげたいと私は急に元氣になりました。

その時ゼスチュア遊びのすぐ傍で椅子を利用した大々的な汽車ごっこをしていました。客席用として椅子が十六か十七位並んでいました。私達はゼスチュアから汽車ごっこに入って行きまして。果してその子供も私の手にしっかりとつかまる様にしてついて来ました。そして私の隣の間を取ろうとしてキアアキアア騒いでいるのです。私はあまりこの子供が変わってしまったので驚くと同時に、何だか背中がぞくぞくする程嬉しくなりました。普通の子供にとっては当然な事なのに「ああ良かった」という気が先ずこみ上げて来ました。きっと私の方がこの子供以上に楽しい嬉しい汽車ごっこをしたのではないかと思うと急におかしくなり一人で笑ってしまいました。するとその子供は「先生何笑ってるの」とげげんな顔をしています。こんな時つくづく可愛い子供だと思えました。何故今まであれ程へだたりがあったのか不思議です。そして保育は、子供と共にする生

活は、理論ではなくてやはり体験を通さなくては得られないものがある、よくよ考えて、子供を怖がっているよりも、何でもなく一緒に遊んでいいうちに子供の心とのつながりを得る事が出来るのだなと感じました。

私達は車掌さんの「北海道、北海道でございませう。お降りの方はお早く願います」という声でキップを渡し汽車から降りました。

そしてお庭の草原（牧場）へ皆で出かけて行きました。いつの間にか、その子の右手を私の左手の掌に感じながら。



—四十四の武器—
子供たちは私が新参者だからと遠慮はしない。彼等の前にあつては他の先輩と同等に見られ、それ以上に彼等の先生として一番信頼される。四十四の武器は意外にもその引金は硬かった……。

Y
生

午後の話合いの時、園長は「貴女達は四十四のすばらしい武器を持っている。」と云われた。

日曜日の朝の事である。「きのう遊園地に行ったよ。」「あたしはねえ、お花見に行ったの。」「僕ね、帆柱山に登った。」と休日の思い出を話合っていると、他組のY男が背中をぼんぼん叩く。と、腕力旺盛な男児数人が「こら、先生を叩いたな。」と、握りこぶしを振りながら近寄って行く。驚いたのはY男である。——皆と一緒に話を聞いてもらおうとしたまでの事だったのに。

又或時、他組のT子が廊下の隅で泣いていた。理由も問いただせず、その儘抱え上げて部屋の前を通りかかると、組で一番強いと認められているK一が「ハハーン、おかしいだい、先生に抱っこされて……。」と大声をあげながら寄って来る。部屋で積木をしていた子供達がわあっと集まり、腕にぶらさがりながら、附いて来る。T子を担任の同僚に渡し、さて部屋に帰ろうかと思う間もなくK一が「ねえ、抱っこしてねえ。」とささやく。

K一を抱くと「あーおかしい、あそこに赤ん坊が一人、あーおかしい。」と他の子供がからかう。その中の一人を抱くと又残りの連中がはやしたてる。

こうして四十四の武器は各自満足の行く迄はその引金を弛めようとしない。

他組の子供達が近寄って来れば、あわてて押しつけ、自分がその場に入る。

はじめての保育の経験

自分達の先生にはさわってほならないらしい。時々それが原因で腕の比べ合いが組同志で転開される。坂を上り子供達を送って行くと、見え始めた小学校から一団の生徒達が「○○先生、先生。」と同僚の名を呼びながら手を振っている。同僚と間違えているらしい。坂を下りその側を通る時、声をかけると「なあーんだ、新しい先生か。」とがっかりした様子に、却って気の毒な気がしたが子供達にはそれが気に入らない。

「あの人達間違えてから……ねえ、先生。」

「違ふよねえ、先生。」○○先生と違ふのにねえ。」と何度も弁解し合う。

四十四の愛の武器は未熟者であるからとおじ気でも、未経験者であるからと遠慮してもそれを認めてはくれない。

彼等の前にあつては、他の先輩と同等に見られ、それ以上に彼等の先生として一番信頼される。

拙ない先生が自信を持って歌う歌は元氣よく歌われるが、一度「こうだったかしら？」と自信のない歌い振りを示すともうだめだ。その歌はいつまで経っても元氣よく歌われない。

一度引金を引いた武器は発砲する以外には引金を弛める方法がない様に、彼等の頭に描かれた記憶は容易に消す事が出来ない。

それだけに、ただ新参者だからと、じっとしてはいられない気がする。

武器の引金を力一杯引けば、弾は遠く迄、力強く、飛んで行く。けれども引く力が弱ければ、当然飛ぶべきはずの距離まで飛ばず、地面に落下し、時には全々飛ばない事さえある。弾の飛ばぬか飛ばないかは引金を引いてみなければ、見当がつかないから始末が悪い。側で見物している時は、「もう少し手を力を入れれば、もっと飛びそうなのに……。」「もう少し手を伸ばしてすればいいのに……。」「さあ今度は飛びそうだ、どれ位の距離、飛べるだろうか。」と勝手に判断し、予測する。

しかし実際にその引金をさわってみて初めて、そのバネの意外にも硬い事に気がつき、引金を引き、弾の行方を見定めて初めて、「あっあそこ迄飛んだ。もう少し力を入れて引けばまだ向う迄飛んだらうに、惜しい事をした。」と気がつく。

子供達の場合もそれと同じだという事に気がついた。

子供の心に触れただけでは、「この子は少し落着きが必要ない様だ。かの子供には愛情が不足している。この子供は少し神経質すぎる。」と感じとれるだけで、どの程度その短所を直す可能性があるものか、又どの程度その持つ長所を伸ばす可能性が方によかったのか、失敗であったのか解るようだ。考えれば考える程、これでいいのだろうか、情性に流れてはいないだろうかと自信を失いそうになる。

四十四の武器の引金を引くべき務めを持たされた私ではある

が引金を引くところか、却って武器に支えられている実情である。その方向をどちらに向けたらよいものか、その引金が何処にあるのかさえ解らず、その位置を彼等に教えられる。

共同製作という程のものではないが、部屋の壁板に貼ろうと思ひ、画用紙に苺を描いていた。子供達が見つけて寄って来る「先生何描いているの。」

「ここに苺の畑を作ろうと思つて描いてるの。」
「ふうーん、先生のいちご、おかしいね。」

という。「それじゃ、もつといい苺作つてよ。」と画用紙を手えたところ、手の掌大の苺を作り始めた。その苺を見た時、私にはまだまだ保育者になる資格がない事を痛切に感じた。

子供達の作つた苺は私の作つたものの四、五倍もある大きさだ。

私の作つた苺は赤色であるが子供達の作つたものは、赤色ばかりではなかった。白色、桃色のものが混じっている。苺の葉は所謂、葉っぱ色Ⅱ緑ではない。枯れた葉っぱがあれば藍色の葉っぱもある。

いろいろな失敗ばかり繰返しているがこの頃では、それでよいのだと思う様になつて来た。

子供の社会で、教えられ、導びかれながら、子供達をその地域社会に適応出来る人間に導く方法を習得する。

子供達との交流が激しければ、それだけ沢山の事を教えられ

又子供達もそれだけ成長して行くであろう。

それと平行して私自身もつと実社会と交流し、豊かな見識を持つ様に、努めなければならないと思つている。

幼年期の意味

ジョン・フイスク著 小川正通訳

新書版八四頁 定価八〇円 一六一円

進化論の立場から幼年期の重要性を鋭く衝く名著

日本の幼児教育

その問題点をめぐりて

長田新・山下俊郎・荘司雅子著

新書版一八四頁定価一三〇円一六一円

日本の幼児教育の問題点をえぐりだし

た鼎談

東京都千代田区 株式会社
神田小川町二ノ五

フレール館

聾幼児と言語指導



松 沢 豪

(一)

耳が聞えない為には、ことばを持たない聾幼児に、どのようにして、ことばを教えたらよいのでしょうか。

聾児は、言語受容の中心的な入口として聴覚の代りに視覚を用います。即ち話し手の口の形の動きを契機にして話される言葉を視覚を通して理解するように導かれるのです。そしてこれを「読話」又は「読唇」といって

ます。

家庭又は聾学校幼稚園において、初期の読話は、次のように指導されます。

幼児の日常生活の中には、その子供について、さまざまな出来ごとがありますが、実は、この出来ごとこそ、読話指導の機会なのです。

子供は、食べたり、寝たり、起きたり、はばかりにいたり、外出したり、遊んだり、おふろに入ったりします。そうして、これらのことは、たいていその母親の世話のもとに行われます。これらの時に母親は、いうでしょう。「オイデ、ゴハンヨ。」「ヨシオチャン、ネマシヨ。」「ヨシオチャン、オキマシヨ。」「ハバカリニ、イキマシヨ。」「カオオ、アライナサイ。」「テオ、アライマシヨ。」「カイモノニ、イキマシヨ。」「オフロニ、ハイリマシヨ。」「タオルオ、トツテチヨ。」「ダイ」等々。聞える幼児でも、こういう場合に、母親のいうことばの、総てを理解はいたしません。然し、母親は、子供と一しょに話しかけたり、笑いかけたり、歌ったりするとを、止めはしません。そして、ついには、そのような行為が繰り返され、母親のことば

が繰り返されている間に、母親のいうことばを、だんだん、はつきり理解してきます。

私達も同じように、これを聾幼児になさねばなりません。聾幼児の読話の発達段階に沿ってこれを具体的にのべましょう。

子供が玩具の自動車を持って遊んでいる、絵本を見ている、積木をしている場面を想像して下さい。親や教師は、一しょに遊んでもいいし、かたわらで笑顔で子供のすることを眺めていてもいいでしょう。子供は、自動車のネジの巻き方が分らなかつたり、絵本の中で特に興味のあるものを見たり、積木をうまく積んだりした時等のように、分らない、自信がない、不安を感じる、或いは、特別の関心や興味がある、更には満足感や、成功感を覚える時、フト、そばにいる親や教師の顔を見ます。その顔や目は、「ドースルノ?」「コレボクモツテルヨ。」「デキタヨ。」「ウマイデシヨ。」などのことを、語っています。親や教師は、すかさず「ソレワ、コースルノヨ。」「ソ。」「ウマイネ。」などと話しかけながら適当に、相手をします。

初期の言語指導は、実にこういう場面をのがさずに取り挙げることにあります。

が、何かを教えようという指導の意識は、表面に出さない方がよいのです。親や教師が指導の意識を表面に出すと、子供は、反撥したり、逃避したりします。私達の話しかけは、子供の遊びを、よりおもしろくし、子供を勇気づけるものでなくてはなりません。

こうして、子供が私達の顔を見る機会を逃さずにとらえて話しかけると共に、洗面、手洗い、食事、入浴、着衣、等日常必ず経験する出来ごとにおいて「カオオ、アライマショー」「テオ、アライマショーネ」「オフロニハイリマショー」「ヨーフクオキマショー」など話しかけてから、まず親や教師がその行為をやつて見せ、も一度話しかけて、同じように、行爲させていると、最初(一)「ばく然と親や教師の顔を見ていた」子供の目が、やがて、親や教師の口の形の動きは、何かを訴えていることを知り、(二)「親や教師の表情や口の動きから手がかりをつかむために、目的をもって顔を見る」ようになります。そしてその場面の生ずるごとに、同じことばが投げかけられていると、ついに子供は、話し手の口の動き、話し手の表情、具体的場面から類推して、(三)「口の動きに、ある意味を結合す

る」ようになります。

こうして、子供に親しい日課に關係のある語、句、文の認識が読話の最もやさしい段階であります。第二の段階は、日課の読話において経験した語や句や文を、新しい今までと違つた場面で使用して認知させることであります。

さらに第三の段階は、発音における子供の発達が、口声模倣(親や教師のいうことばをそれらしく口を動かしていうこと)をし始めて、物や人の名前を知りたがる時に達せられます。例えば、子供が物を示すかも知れませんが、子供は、物の名前を知りたいのです。彼は、はつきりそこに、ことばを見ようとして注意深く、親や教師の顔を見つめます。彼はこれを知りたい為に、新しいことばを読話しようとするのです。こうしてことばの読話の語イ(彙)は増していきます。

注 (一)(二)は初期の読話の発達段階です。

(二)

以上のように、幼児の毎日の生活の中に置いて生ずる自然の機会をのがすことなく、巧みにとらえて指導される読話を、私は、一般

読話」と呼んでいます。これに対して読話の指導の系統を、段階的に追求するよう計画された意図的な読話指導を、一般読話と相呼応して行う必要があります。そして、これは私は「特殊読話」と呼んでいます。続いて、「特殊読話」について述べましょう。

物に名前のあることもまだ知らない二、三才の聾幼児の「特殊読話」は、次のような感覺訓練から始められます。

母親や教師は、まず二つの玩具を子供の前に置き、その一方と同じ玩具又は絵を子供に示し「コレワ、ドレ」といいます。子供が示された玩具又は絵と同じものをさし示したら「ソーソーウマイネ」といって、笑顔でほめてやります。

さし示すことが出来なかつたら、こちらで子供の代りに「ハイ」といって、同じものをさし示します。そして同じようにまねさせます。次は他方の玩具又は絵を示し「コレハドレ」といいます。そして同じように「ハイ」といってさし示めさせます。二つで出来るようになったら、三つ四つと玩具の数を増します。

このような遊びは、色紙や色毛糸やリボンなどで、色合わせとしてやったら次は、円、三角、四角の形合わせとしてやります。

ロ、細かな部分の違っている単純な品物や玩具の絵を識別する。

子供の親しみ深い、動物や乗り物の絵や、日常生活に密接な関係のある衣類や、食事の道具などの絵を、大きさは同じで、色か模様を少し違えて、一対ずつ数種作っておいて、その細かな差異を識別させるのです。方法は「イ」と同じようにします。

ハ、瞬間的に見て、絵や色や形を識別する。

「イ」「ロ」で述べた材料の二つか三つを子供の前に並べて、それに対応するもの一つを子供に瞬間的に見せて、それを識別させるのです。

以上「イ」「ロ」「ハ」の出来る子供は、読話のレデネスが出来ていると考えてよいでしょう。

ニ、口形と実物や絵又は動作を合わせる。

最初二枚の絵例えば牛と犬を用意します。一枚を、子供に見せて「コレワワンワンデスヨ。」といっている子供の前におきます。同じように、もう一枚を「コレワモーモーデスヨ。」

といつてこれも子供の前におきます。そして「ワンワンドレ。」といいます。子供が、だまっていたら指導者は「ハイ」といつて犬を指します。もう「一度ワンワンドレ。」といえます。子供が「ハイ」と犬を指したら「ソーウマイネ。」と、ほめてやります。このようにして、二枚が確実にできるようなつたら、もう一枚増して三枚で行います。

こうして子供は、物に名前があることを知ると共に事物を読話出来るようになります。

また「……ワドレ」という問になれたら「……オミセテ。」「……オチヨーガイ。」「……オトツテ」というような問い方に進みます。

読話の語彙が二、三十になったら、形容詞（アカイ、アオイ、シロイ、等の色名、大キイ、小サイ、アツイ、ツメタイ、タカイ、ヒクイ、ナガイ、ミジカイ、重い、軽い、等）、十名詞の形の読話（大キイボールワ、ドレデスカ等）に進みます。

口形と動作のマッチングは、最初太鼓を「ドン」と一つたたいたら立たせませす。「ドンドン」と、リズムカルに叩いたら歩かせませす。この合図を理解したら、次に太鼓を叩く代りに「タツテ」といつて立たせませす。「ア

ルイテ」といつて歩かせませす。そして「ドンドン」と乱打して「ハシツテ」「トン・トン」と間をおいて叩いて「トンド」という命令語を指導します。そして、これらの動作語が読話出来るようになると「ユックリアルイテ」「ハヤクハシツテ」というように、副詞+動詞の形の読話に進みます。即ち口形と動作を合わせる指導を纏めて申しますと、

1、鞆児の感覚を通して、ある合図を理解させること（合図そのものを、はっきりさせるためには、鞆児の振動感覚や視覚に訴えたがよい。）

2 その合図を口の形（ことば）におきかえること。

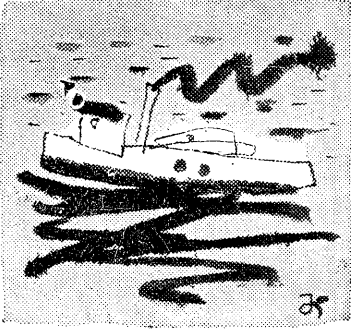
3 口の形にあらわれることばの合図の区別を分らせること。ということになります。

以上のような、指導によって、初期の読話の語彙の建設は、名詞、形容詞、動詞、副詞と進めていきます。

（日本聾話学校幼稚部主事）

× × ×

沖 繩 の 旅



戸 倉 ハ ル

去る三月二十八日早晩四時半、機はカーテンを閉め切ったまま、軽い振動を感じさせて、無事に——全く無事という以外にたとえようもない——未知の島、沖縄は那覇飛行場に第一歩を印した。

四時間半、外気と全く隔てられて居て降り立つと、未明の空気が澄み切って、この時ほど空気のうまさを感じたことはない。贈られた百合、ガーベラの花の香が、思ひなしか暖くさえ感じられた。又、中天にかかるオレンジ色の月の美しさ、これをしも南国の月と云うのであろう。

私の渡島の目的は、彼地の体育振興のため、沖縄教職員会の招きで、ダンスの講習会をすることであった。

翌日から始められた連日の講習には、戦前戦後を通じて始めてというので、はるか宮古、八重山の離島から、約一昼夜の航海を経て来られた人もあり、午前九時から午後五時までの講習に、一人の落伍者もないことには、感服の外なかった。併し、幼稚園から大学に至る過程に於いて、女子の体育の有資格者が全然ないことに、なお驚いた。目を重ねるに従い、すべてに情熱的で

あることが、南欧に相通するものである様に思えた。たまたま聞いた民謡の歌詞の中にも、それがみられるので、ここにその一つを挙げてみよう。

恩納嶽 オンナダケ 彼方 カノカタ 里が生れ島 サトがなまじ
森ん押しぬきて モリノオシ 此方 ココ なさな

「恩納嶽の向うに彼の生れ故郷がある。山が邪魔になるから、押しつけてこちらに引き寄せたいものである」という意味のこの歌は、私をひどく感動させた。

気候は、東京の七月初旬ほどと思われたが、日中の陽ざしに比べて朝夕涼しく、乾燥しているせいか、割合にしのぎよいといえ、はや、蚊帳を用いるとは、出発の日におーヴァーを脱ぎ捨てた私にとって想像だに出来ないことであった。十二月に桜が咲いて散り、三月の末には、こちらの三倍ほどもあるかと思われる大きな桃の花が、真紅に咲いていた。大体三月から十二月まで扇機機の必要を感じるという、まことに熱帯的気候である。

戦前は、美しい自然の風光を誇っていたといわれる所でも、全壊に近く変貌し、僅か鄙地に残る古の面影に、限らない哀愁を

感じた。その昔、近辺の島をもその輩下に治めていた尚家の王城こそ跡形もなく、今は、そこに近代的な琉球大学の校舎が建てられている。

一島は、行政上、南、中、北に三分され、講習会は、南部の那覇、中部の胡差、北部の名護、それに最北部の辺土名の四ヶ所で行なわれたので、島を縦断する舗装道路をよく利用したが、交通機関は自動車のみとただけに、その数もおびただしく、人口に対するバスの台数は世界一、トラックが三位、タクシーが五位という成績は、あの狭い島には不釣合の様に思われた。

車窓から眺める民家は、田舎では、颱風に備えた、勾配の大きいかやぶき屋根が多く、町に入ると、トタンや琉球瓦の屋根も見られ、未だに、大部分が板の間にござ敷という生活をもてみてもわかるように、生活程度はかなり低い。従って、教育機関の設備もまだまだ不十分である。

バナナや、パイナップル、パイナップルの葉蔭に、年老いた女の人が、琉球がすりを短く着、髪をまとめて結い上げ、こちらのお齒黒に匹敵する手の刺青を見せながら、

頭に荷物をのせて歩くという昔の名残を見かける外は、いわゆる琉装は巷から消えていた。

島の名物は、豚と甘藷といわれるだけに、豚料理が沖縄の特徴であり、珍らしい料理が数多く見られた。甘藷は、銘酒泡盛の原料として一年中作られるとは、いも好きの人には羨しい話である。特に、もぎたての果物の味は格別であった。四方海に囲まれて、その幸を集めているが、えび、かきを始め、魚類すべてが大作りで、鱗の衣裳はなかなかの豪華さ、味より見た目というのが実感であろう。中でも、「かたかし」という緋鯉のような魚は、鯛をしのぐものであった。一流のホテルの高級の食膳に、紫色の海苔、塩鮭、さんまの罐詰、焼めざしが供されたが、これらはこの島に無いもので、御馳走のつもりであった。砂糖が大小数々の工場によって精製され、大きな収益を上げているようである。

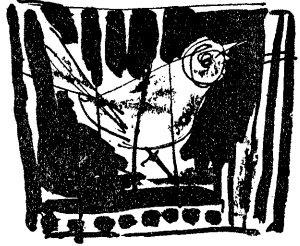
大陸の影響を受けた、渋い味の陶器を始め、手の込んだ「べにがた」という型押し染物、それに有名なかすり等の民芸品が、多く伝えられているし、無形文化財として

の琉球舞師の流麗な美しさは、古武術、空手に残る武士道精神と相俟って、世界に伍して行くに値し、あたかも、焼跡の中から玉を見出すにも似た喜びを感じたものである。特に、民謡が酔し出す情熱的な、しかし感傷的な雰囲気は、南海に孤立した離島の運命を訴えんばかりに思われた。

沖縄といえ、ひめゆりの塔、健児の塔と、映画に見、話に聞くだけに悲惨な一幕をあげた南端の戦跡は、直接肉親に犠牲者を出した人の話されるところによれば、なお一層厳粛な事実であり、未だに、壕附近からは人骨や遺留品が発掘されるのと、鐘乳洞の壁部、岩壁のすみずみに、若き叫びが今もなお滲透しているようであった。参詣人の絶え間がなく、花東が、その霊を慰めるべく、うず高く積まれていたが、それは悲しい姿であった。

見るもの、聞くものに一々感激していた二十日間も夢のように過ぎ去り、絶ち切れぬ気持を振り切つて、四月十五日午後零時半、帰途についた。

(お茶の水女子大学教授)



夏の 読書室

暑い夏はまとまった書物に腰

をいれて勉強するのにも適しています。逆説のようですけれども、まとまって落着いた時間が得られるのは何といつても夏休みみでしょう。そこで夏休みのための良書を御紹介しましょう。

★ ★ ★
莊司雅子著 幼児教育学

(柳原書店 昭30 三八〇円)

此の書物は、全体がフレイベルの精神によつて貫かれており、フレイベルの論を最もそのままに生かしつつ現代に即してとりいられているということができる。氏はフレイベルの現代的

意義として、「フレイベルの幼稚園のもつ意義と価値とについては、現代の識者もまだ十分に知らない。そればかりでなくて、フレイベルの意図するところと全く反対の思想さえ世界の幼稚園を風靡している。」(95頁)と

幼稚園教育を根本的に検討し、更にそれを教育内容にまで関連づけておられる。氏は「フレイベルの幼児教育論は、今日新教育で主張している原理を立派に備えている」と云つて、現代の教育原理と巧みに調和させながら説を展開しておられる。内容形式ともに整つたすぐれた書物である。殊に「幼児教育者論」

では氏の面目躍如としていろいろ批判をもつて見ることもできようが、幼児教育者必読の書であり、氏のフレイベルの教育学(再版 昭30 フレイベル館 四〇〇円)とともに、夏休みのようにまとまった時間のあるときでなければ読めない書物である。

★ ★ ★

森脇要著 保育のための臨床心理学(厚生閣 昭30 二二〇円)

機智に富んだ著者が、長年の臨床経験を通して、また最新の臨床心理学の知識を駆使して書かれた有益な書物である。落ちつきのない子供、自己活動のない子供、乱暴な子供、内気な子供、盗みをする子供、恐怖心の強い子供、発音の正しくできない子供、吃音、等々、幼稚園や家庭で扱かに困る子ども問題を網羅し、一つ一つ丁寧に、その問題の考え方、具体的な指

針、処置を示してある。このように困る問題については、問題の原因を発見して原因を除くだけでは十分ではなく、「発生原因の追求だけで満足したり、またもう手おくれだと失望したりすることなく現在の問題行動を支えている原因をどこまでも追求してゆくことが大切」という著者の基本的態度を学ぶべきである。またこの書物は、単に個々の問題の取り扱い方を断片的に示しているのではなく、多くの問題を一貫して働らいている心の「からくり」を教えている。

それだから、読者はこの書物を読みながら子ども問題を考えるところにも、おとなである自分自身の問題についても教えられるところが多いと思う。「いろいろのべましたが幸福への道は、自分をごまかさず、現実を正直に、客観的に見ることで、す。これには勇気が必要としま

す。道徳的な勇気を必要としま
す。しかしこの本当の勇気さ
えあれば、本当の自分を知ること
ができ、それ故本当の意味での
幸福を味わうことができるので
す」というのが著者の結語であ
るが、これらの具体的な子ども
の問題を通して、著者がどのよ
うにしてこの結論に達するかを
見出すのは興味深いことであ
らう。山下俊郎著「児童相談」(光
文館 昭30 二八〇円)、戸川行
男著「児童相談」(金子書房 昭
29 二八〇円)とともに、子ども
の問題について困っているおと
なによい指針となろう。

★ ★ ★
林健造著 歌う幼児画

これは楽しみながらよめる書
物である。著者のすぐれた創作
力と、子どもの心を鋭くつかむ
力が結びついている。著者の
ことばをかりるならば、虫をか
けないと云っていたこともが、

くものすを見てきて、とうさん
とんぼがかかったよ、おおきな
とんぼがかかったよ、グルグル
かわいめだまだよ、と歌を口
ずさみながら、くものすにいろ
んな虫をひっかけて、見事な絵
をつくってしまった。そうであ
る。

この本が子どもとのふれ合い
から生れたように、これはよみ
ながら、自分でもまた工夫して
やってみて、子どもと一しょに
夏のひとときを楽しむのによい
本である。夏の海辺に、高原の
散策の道すがらに、この著者の
とり上げ方を応用したら面白い
ものがまたふえるのではなから
うか、などと考える。

★ ★ ★
（お茶の水女子大附属小学校取
扱い 二五〇円）

★ ★ ★
その他、夏の間勉強するの
に適當な書物として、
山下俊郎著 保育学概説

（厚生閣 昭31 二五〇円）

松村康平著 保育のための幼児
心理

（厚生閣 昭31 三二〇円）

現代保育講座 全五巻(金子書房
昭31 二巻 五八〇円 三巻 五五
〇円 四巻 五巻 五〇〇円)

また、夏のまとまった時間に、
もう一度故倉橋惣三先生の諸著
書を味読するのも良いでしよ
う。

倉橋惣三著 幼稚園真諦
（フレーベル館 昭28・二八〇円）

倉橋惣三著 フレーベル

（岩波書店・昭26・一四〇円）

倉橋惣三著 子供讃歌

（フレーベル館 昭30・二〇〇円）

（津守 記）

× × ×

× × ×

× × ×

お茶の水女子大学附属幼稚園内
幼児教育研究会編

幼児の劇あそび集

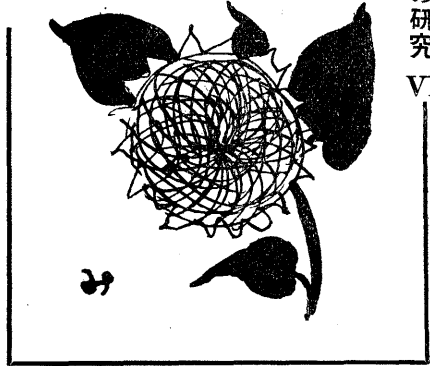
A5判 207頁
頒価 220円

お茶の水女子大附属幼稚園において、実際子どもたちがよろこ
んであそんだもの二十数種をおさめたものです。

（本書のお申込みはお茶の水女子大附属幼稚園又はフレーベル館にてお取次ぎいたします）

言 葉 と 知 能

〈下〉



村 山 貞 雄

9 精神薄弱児と言葉

知能の低い幼児は、その会話を観察すると、種々の特徴がみられる。

精神薄弱児の言葉の特徴として、つぎのことがあげられる。

一、話の内容がまとまらない。

これは、意味のまとめ方のものが、へたなことにもよるが、このほかに思ったことをうまく表現できないこともその原因になる。

内容のまとまらない話し方の例をあげる
とつぎのようである。

〔話し方のまとまらない例〕

K・T 知能指数五十一 つぎの言葉は辨当を持って来なかったK・Tが、もうお昼間近かになったので、辨当が届くはずだが、まだ届かないということをも、先生に訴えているものである。

「先生あとから、先生かず子きょうおべんとかず子持って来なかったのよ、早く来な

あかない、早くかず子も、かず子はねー、かずこー、先生かず子先生かず子、かず子持って来なあー、かず子。」

二、話の内容がよく変わる。

普通の幼児も、話の内容はよく変わるが精神薄弱児は特に、思考の内容がよく変化する。逆に感情が固執することもみられる。

三、話しぶりが幼稚である。

知能指数十九から六十六までの精神薄弱幼児十七名について、幼児が自由遊びをしているときに、十五分間ずつ日を変えて二回、一人につき合計三十分間観察記録したところ、主語と述語があるいわゆる完全な文のかずは、全体の七・四パーセントであった。これにたいして、条件児として、知能指数九十七から百三までの幼児を十一名まったく同様な方法で観察記録したところ、主語と述語のある文は、全体の十二・四パーセントで、普通児のほうが、精神薄弱児より五パーセント多かった。

幼稚な話しぶりの例をあげると、つぎのようである。

〔幼稚な話し方の例〕

例一 K・H 知能指数四十五

「ジャー？（あけていいか？）ほや（ほら）、プープー（自動車）、うん？うん？うん？（やっていいか？）えっばい（一杯）、えっばいね、あ？（えっ？）、う？ほや（ほら）、やまやま、こえ（これ）、うー、プープー（自動車）、プー、ない、えっばい（一杯）、ほや（ほら）、ゴァー（汽車）、プープーえっばい（自動車が一杯ある）、ぼーぼー（乗せてくれ）、ない、えっばい、えっばい、ほや、あー（取ってくれ）、プープーあー（自動車を取ってくれ）、プープー、ポッポー。」
（以上十五分間）

例二 S・T 知能指数二十四

「かっちゃった、かっちゃった、おん（クレヨンの箱にクレヨンをおしこむ）、あえー、おん、あとほ（遊ぼう）、なあに、なあに、あんだ（なんだ）、でた、ごっとうたま（おしまい）、おあたん（おかあさん）、あとほー、あとほー、おねえちゃん、ちえんちえー（先生）、あとほ、いこよ（行くうよ）あい（はい）、あえ（あれ）、やって、ないちよないちよ（内証、内証）、ちえんちええ、だめ、だめでちゅ、たいちよたいちよ（体操体操）おい、これ、ゆきゆきのやま（雪の山）、お

あたらん（おかあさん）、ちえんちえー、こい、おい、ちえんちえー、あちやまいあちやまい（おしまいおしまい）、ばいばい、ね、おいで、アトポッポー、アメー。」（以上十五分間）

四、身ぶり手ぶりが多い。

身ぶりや手ぶりの多い話し方の例をあげると、つぎのようである。

「身ぶり手ぶりの多い話し方の例」

U・O 知能指数三十五 U・Oは「こう」と言いながら、ほとんど身ぶり手ぶりで話していた。

「先生、こう、こう、こう、ねんねだねんねだ、ねーちゃん、ねむれ、だー、おねえちゃん、こご、うわん、ねえちゃん、こう、ねえちゃん、こう、ゆき（自分の名前）、こう、ねえちゃん、こう、ねえちゃん、こう、よ、ねえちゃん、こう、ちてるの（こうしているの）ねえちゃん、よじゃよちゃん（友だちの名）ないてるほら、ある、ようちゃん、いちゅ（椅子）、こう、こう、おねえちゃんもほら、こうやる。」（以上五分間）

なお精薄幼児は、身ぶり手ぶりが多く同時に、話し方の内容に抽象性が少ないの

が特色である。

五、あまり話そうとしない。

前述の調査の結果によると、精薄児は、普通児の約半分しか話しておらず、両者の

一表 文のかす

	\bar{x}	σ
精薄児	16.2	18.2
普通児	30.0	11.5

あいだには、五パーセント以下の危険率で有意差がみとめられた。（一表参照）

なお、精神薄弱児のなかには、よく話す者がある。たとえば、絶

えず人に話しかけている者もある。

六、ひとりことを言う。

精薄幼児は一般に友だちと話すことが少なく、おとなと話すことが多い。たとえば教師や外来者によく話しかけ、友だち同志では話すことが少ない。前述の調査で三十分話した文のかすの平均を示すと、二表のようである。

また、話す相手のことを、特に相手の感情をあまり考えない。

七、文章がみじかい。

前述の調査で、一文中の語数を示すと、三表のようになり、○・一パーセント以下

二表 精薄児の話し相手

話し相手	普通児		精薄児		備考
	\bar{x}	σ	\bar{x}	σ	
先生と話す	2.2	3.2	4.6	6.5	0.3>P>0.2
友達と話す	18.1	14.6	2.1	2.1	P<0.001
その他の人と話す	0.0	0.0	1.3	6.0	0.01>P>0.001
ひとりごと	1.4	2.5	5.1	3.3	0.01>P>0.001

三表 一文中的の語数

	\bar{x}	σ
普通児	2.06	0.65
精薄児	0.99	0.59

の危険率をもって有意差があった。
八、語彙が少ない。

これは大きな特徴であった。たとえば、この調査で或る幼児は、なに「ごのおわりでも」「ごとうたま」といい、口のことをあなといっていた。

精薄児と条件児の語数と語彙数をしらべた結果は四表のようである。この表のべ語数は、自立語（助詞、助動詞、融合形を

四表 のべ語数と語彙数

	のべ語数	語彙数
普通児	\bar{x} 63.4	45.9
	σ 42.4	15.1
精薄児	\bar{x} 21.1	12.1
	σ 23.2	12.7
備考	0.01>P>0.001	P>0.001

言葉にもひとりよがりが多い。

たとえば、調査中、或る幼児はものの名前をしばしばなわもという言葉で代用したり、消防自動車のことをダイガーといったり、あのねを、ぶらといったりしていた。また音がぬけることも少なくない。たとえば、あのねがのねとなり、お山がおまとなるような例である。条件児のばあいは、音がぬけることがきわめて少なく、調査中あきらかに音がぬけた言葉を使用した者は、桃色をもいといった一例にすぎない。

十、発音に変なものがあり、いわゆる舌足らずの感じがする。
まちがう発音の内容は条件児と特に異なつたことはないが、まちがい方がはげしい。

除いたもの（のみ）である。
九、自分だけの言葉をつかう。
文章にもひとりよがりが多いが

六表 品詞の使用度

品詞	普通児			精薄児		
	\bar{x}	σ	%	\bar{x}	σ	%
名詞	29.5	32.0	33	9.9	10.3	35
代名詞	8.2	4.1	9	1.4	2.2	5
動詞	14.5	7.7	16	3.0	7.7	10
形容詞	4.2	4.3	5	0.5	0.6	2
副詞	2.5	2.6	3	1.7	2.3	6
感動詞	4.5	3.0	5	1.4	1.5	5
接続詞	1.2	1.4	1	0.2	0.2	1
助動詞	5.2	3.2	6	1.7	2.3	6
助詞	15.8	8.3	18	5.1	6.9	18
融合形	3.5	1.3	4	3.5	0.8	12
計	89.1	—	100	28.4	—	100

五表 よくまちがう発音

よくまちがう発音
さ→チャ, ア, ハ, タ
し→ヒ, エ, チャ, チ
せ→チュ, シュ, テ, ヘ
しょ→チヨ, ヒヨ
た→カ, チャ
す→チュ, ヒュ
そ→ヒヨ, ト, チヨ
は→ア
ほ→オ
れ→エ
ち→ティ, ヒ
ら→リヤ, ヤ

十一、形容詞を使うことが少なく副詞を使うことが多い。また代名詞、動詞を話す

しばしばまちがう発音として、サ行、ハ行、ラ行、タ行などがある。（五表参照）

ことが比較的少なく、融合形を特に多く話す。

前述の調査にあらわれた品詞の使用度を示すと六表のようである。

10 ろう啞児の知能

ビュラーは、乳児期はチンパンジー時代であり、人間がこの時期からぬけ出すのは言葉をつかいはじめることによってであるというが、言葉をつかいはじめる時期の遅速と知能の関係は、先月号でみたところである。

ところで、幼児は知能が発達することによって言葉が発達するが、逆に言葉をつかうことによって知能が、少なくとも思考力や記憶の技術が)発達すると考えられる。

このことは、後天的なろう児の知的特質を調査することによってもあきらかにされる。すなわち幼児は耳がきこえなくなると急速ないきおいで言葉を忘れはじめが、言葉を忘れると同時に概念的な把握力その他がおとろえることによってわかる。

ろうの幼児の知能は聴児に比較して、一般に、つぎのことがいえる。

(1) 何々することというような概念把握力がおとろる。

すなわち、動詞の連体形にあたる考えが困難である。たとえば、口語を習っているろうの幼児にたいして、ビネー式知能検査にある「つくえは何をするものですか」という問いをおこなったばあい、これにたいして、「勉強する」とまでは答えられても、「勉強するもの」という概念的な答が困難である。

(2) 表面の底を流れる意味の把握力においておとろる。

すなわち、個々の現象の奥にある一貫した規則や規範を抽象して考える能力が低い。(これにたいして、盲児は正確な概念の具体的な把握力がおとろる。)

(3) 想像力がおとろる。

たとえば、口語をならっているろうの幼児にたいして、「あなたがおもちゃをこわしたらどうしますか」とたずねたばあい、「おもちゃをこわさない」と答え「それでもこわしたら、どうしますか」と、かさねて問うと、「けっしてこわしません」という意味の答をする。こ

のように仮定して考えるちからが弱い。

(4) 語彙量が少なく、言葉によって知覚を概念的に記録できないために、記憶力が結果的に非常におとろる。

(5) 助詞の使用をあやまることが多く、意味の関係が時折正確を欠く。

ろう児の知能は、以上の諸点で聴児よりも発達がおくれるが、このことから逆に、幼児の知能が、言語の使用ということによって、これらの諸点が特に推進されると考えられる。また一歳台の幼児は、言葉をつかえないチンパンジーとも特にこれらの点でことなっている。

なお、後天ろうの幼児について一言すると、純粹の意味で後天ろうといえるのは、約満四歳以後であるが、約満一歳から約満四歳までの早期失聴者に知能的な問題が多い。すなわち、字によるコミュニケーションと発声が一致してこない。

これ以後の者は、文字と言葉が大体一致してくる。そして、一応言葉をつかひこなしていたから、文字だけに切りかえてもうまくつかえる。一方四歳以前の幼児期の失聴者は、文章を書いても、あいまいになり、助

詞や助動詞の使用がきわめて困難である。
なお、満一歳までの失聴者の知能については、先天的の子どもと大体差はない。

11 聴啞児の成長

幼児の知能と特に関係の深いものに聴啞の問題がある。

生理的発音障碍には、発音異常と発音異常があるが、これを併せて、構音異常という。ただし、通俗的には、発音を構音の意味につかっている。

構音異常の幼児のうち或る者は、満四歳頃になれば、障碍が大体治癒する。しかしその原因は不明なことが多い。

一般に、知能と関係のあるばあい、すなわち、精薄性の構音障碍は、三歳半乃至五歳ぐらいで、それ以前にくらべていちじらしく障碍がとれてくる。

聴啞はかならずものが言えるようになるから心配しなくてもよいという人があるがそれは、精薄性構音障碍や性格の異常や後という発音障碍のことを考えているのである。(尤も、耳がきこえるが全然ものをいふことが出来ないおとなに、筆者はであつ

たことがないし、そのような人を実際にみたという学者にも、いまだあったことがない。)

生理的発音障碍のうち或る者は四歳ぐらいで直るということは、発音障碍は四歳頃まで、たとえば精薄性の構音障碍かどうかというような、原因の見分け方の困難なことが多いということによる。

すなわち、生理的発音障碍の原因は、四歳頃まで不明なものが多い。軟口蓋の上りの運動の不完全、舌の異常、舌繫帯(舌の下についている、ひものような膜)がみじかすぎたり舌の先のほうにくっついていたりするような異常、口蓋破裂、みつくち、歯列の異常、また扁桃腺やアデノイドが大きくて口の奥のほうをふさいでいるときなどは音を発しようが、語音(和音を抽象化したもの)を発しにくく、比較的、原因を把握しやすい。

しかし、軽度の聴力障碍になると、四歳頃までわかりにくい。また声帯異常の原因によるものも、四歳頃になるとわかる。そして、これらはいずれも満四歳以後も構音障碍をとまなう。

しかし、これら以外の原因によるものは大体四歳頃に言葉が言えるようになる。これは何らかの原因で幼児前期に発音がおくれているのが、その原因にあたる機能が、子どもが成長するにしがって次第に発達してきたためであると考えられる。その代表的なものが、知能遅滞や、以上のような原因がみつからぬ発音障碍(「か」行が言えなかつたりする例)である。

そして、これらは大体満四歳頃を中心として障碍から脱することが多いのである。

× × ×

× ×

フレール以後の幼稚園

—(12)—

津 守 真



舟

幼稚園と人種問題

二年前の夏にピーボディと幼稚園という題で本誌に幼稚園の歴史の初期の挿話を書いたものを含めると、私の幼稚園史も拙い筆を細々ながらつづけて、今月で十三回目になる。そこで今回は幼稚園の歴史の中の一挿話を記してみようと思う。

人種問題と幼稚園という奇妙な取り合わせであるが、案外関係が濃いのである。「ピーボディと幼稚園」(二昨年八月号所載)の中にも触れたように、米国で始めて幼稚園が創立されたのは、一八六〇年である。この最初の幼稚園が創られた翌年に、米国ではかの記念すべき南北戦争が火ぶたを切った。エリザベス・ピーボディがその始めての試みに忙しく過している間に、巷にはすでに戦の噂が頻々と飛んでいたのである。

南北戦争は周知のように、奴隷を解放し、自由な人間にするために、奴隷制度に反対する北の方の人々と、この制度を守ろうとする南の方の人々との間に、奴隷制度のために起った戦争である。この戦争によって、黒人は白人と等しく扱われるような法律ができるようになり、奴隷制度は廃止されるようになった。とはいえ、先日までしきりに新聞で騒がれていたように、南部の諸州では黒人は日常生活の到る処で差別待遇を受けていたのであるが。しかし人間は、生れつき黒

く生れようが、白く生れようが、その皮膚の色にかかわらず、人間としては同等の価値をもつことが、原理的に確認されたのはこの時がきっかけになっているので、この限りこの南北戦争は普遍的な意義を持っていたのである。

人々の議論が奴隷制度の是非に沸とうしていたとき、エリザベス・ビーボディは奴隷制度反対論者であった。まだ幼稚園運動に乗り出す前のビーボディは、自ら本屋を開いて、知識人、文化人たちの議論を交す社交場をつくり、その女主人として熱弁を知られていたのであるが、黒人を擁護しての彼女の熱心な論じぶりが眼に浮ぶようである。

ビーボディ女史の奴隷制度反対論は純粹に人間的な立場に立つものであった。そもそも此の世に生れてきた人間に、皮膚の色が違おうが、その他もろもろの特性が違おうが、人間の価値として上下の差はあるはずがなく、等しく教育も受けられて然るべきはずである。彼女のこのような純真な考えは人から利用されようとしたこともあった。あるとき、ビーボディ女史の所にアメリカ、インディアンの女が訪ねてきた。アメリカ・インディアンは奴隷ではないが、黒人と同様に蔑視され、差別待遇を受けていた。このことはアメリカの開拓の歴史を見れば直ちに分ることであるが、奥地の森や平原に住ん

でいたアメリカ・インディアンは白人によって征伐されて、次第にもっと奥地へ、不毛の磽地へと追いやられて、すっかり闘争心を失う程に圧迫されてしまったのである。ビーボディ女史はこの白人の横暴を常日頃から憤っていた。外来者である白人が原住民であるインディアンの土地を奪い、原住民がてむかえばこれに闘争を開始してゆくのであるから、その行為に関する限り、それは憎むべきである。このビーボディ女史のところを訪れたアメリカ・インディアンの女を、彼女は懇にもてなし、話をきいた。話はこのインディアンの女が、教育を受ける機会が殆どないインディアンの子どもたちのために学校を創りたい、ついでに寄附をしてほしいということであった。ビーボディ女史は直ちに相当の額の金を与え、毎月寄附することを約束したのである。ところがこのインディアン婦人の話は全くでたらめであった。学校の計画など、どこにもなかった。間もなくそのことがビーボディ女史にも知れたのであるが、彼女はそれを憤りもせず、その後金を送りつづけたということである。現在に至ってもアメリカ・インディアンの保護は十分でないのに、ビーボディ女史が当時であつてこのような問題に目をつけたのは卓見である。

幼稚園が創設されたころは、南北戦争のときであり、人道

的な立場から、人種問題が議せられ始めていた時である。このようなヒューマニズムが漂っていた時期であるから、幼稚園運動が、このような地盤の上に、意外に早く波及していったのであろう。ピーボディ女史の考えをもつてすれば、幼稚園とは、皮膚の色などのようなことには関係なく、人間であるからには誰にでも与えられるものであり、人間の中にある人間性を養ふことがその課題だったのである。

ピーボディ女史の幼稚園には実際には黒人の子どもはいなかったらうと思う。南北戦争がやっと始まった頃では、北部諸州には黒人は殆どいなかったわけである。黒人のための幼稚園を考え、黒人の教師を幼稚園にいれようとした最初の試みは、私の知る限りでは、ブロー女史のセントルイスの幼稚園である。(三月号参照)セントルイスは、現在では米国の中でも人種問題の多い市として知られている。この市では現在まで、黒人と白人との差別待遇が法律的に認められてきた。教育も結婚も、電車の乗り場に至るまで、黒人と白人の間には区別があった。このような市は北部諸州の中には数える程しかないのであるが。現在、このような人種の偏見の強い市において、ここで最初にできた公立幼稚園で、黒人の子どもが対象とせられたということは注目すべきことであると思

う。その後黒人の組がどうなったかはよく知らないが、恐らく黒人の幼稚園は黒人の幼稚園として隔離されてしまったのであろう。結局、この試みは成功しなかったにしても、幼稚園が最初にこの人種問題の解決に乗り出していったということは、むしろ現代よりも先んじてさえたと言えよう。

現在では北部諸州の幼稚園では黒人も白人も差別なく一緒に教育されているのが普通である。幼稚園としては、少くとも黒人と白人と差別待遇をする理由を見出すことはできないのである。もちろん、家庭や近隣社会で人種の偏見の強い地域では幼稚園にもその問題がもちこまれるわけであるが、幼稚園として人種的差別をする理由はどこにも見当らない。幼稚園はどの人間にも等しく関心をもつのであって、単に人種のみでなく、階級も、その他諸々の社会条件をもこえて、どの子どもにも関心をよせるのである。そのことは幼稚園の発展の節々にものぞくことができたのである。その限りにおいて、幼稚園は国際的なものである。幼稚園の教師はこの国の幼稚園にいても、自分の幼稚園の子どもに対すると同じ関心をもつことができるだろうし、どのような皮膚の色、どのような身分の子どもがきても、同等に関心をもつのである。それは幼稚園の歴史の始まりからそうだったのである。

本年は各処で三才児の保育を始めたことをきく。

三才の子どもは四才の子ども、あるいは五才の子どもとずい分いろいろの違いがある。四才の子どもは入園した頃から、もうかなりたくましく友達の間で遊ぶことができるのに、三才の子どもは入園してしばらくたつても、友達と一しよになつて遊ぶということがなかなかむづかしい。同じところで遊んでいても、お互いに関連のないばらばらなことをしている。

四才の子どもは同じ遊びをかなり長く続けることができるのに、三才の子どもは今やっていることと、次の瞬間にやっていることとはずい分違う。ふわふわと雲のように遊びが變つてゆくのである。このことは子どもが小さい程一層そのようである。赤ん坊の顔を見てみると、笑顔、泣顔、むつかしい顔、にやにや顔、と次から次へといろいろの顔をみせてくれる。瞬時のうちに表情がかわり気分が變る。よく見ていると面白いが、おとなはとてこれだけの気持の變化についてゆけない。三才の子どものときもそうである。あれだけの活動の變化、気持の變化になかなかついてゆけないのであ

る。

だから、三才の子どもが、十何人もいると、うっかりすると子ども達の氣持の變化を見逃しはしまいかということが恐しい。こちらで不注意に動くと、子どもの自然の動きに反することをしないかと思う。四才の子どもならば、おとなの氣ままにもかなり耐えられる。けれども三才の子どもを見てみると、彼はまだ余りにも弱く柔らかい。お母さんの膝のまわりからやつと離られる頃である。

三才の子どもの組をつくるときには、四才五才の組よりもつと細かな配慮、環境にも材料にも心づかいが必要である。幼児教育者の通念に従えば、子どもが小さい程その教育には骨が折れるし苦労が多い。とするならば、三才児の組は幼稚園の中で一番大變である。三才の子どもを四十人も一組にいれるというようなことは思いも及ばないだろう。

おうちの子ども部屋をひろげたようなもの、三才児の組はそんなものではないだろうか。

今月は暑い夏であるのに、汗の流れるような編集になつてしまった。

九月号は例年のように保育学会の特集号である。

幼児の教育

第五十五卷 第八号

定価金五十円

昭和三十一年七月二十五日印刷

昭和三十一年八月 一日發行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼

發行者 津 守 真

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

發行所

日本幼稚園協會

東京都板橋区志村町五番地

印刷所

凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所

株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いします。